

アジア・太平洋戦争期の戦略研究における
地理学者の役割

— 総合地理研究会と陸軍参謀本部 —

柴 田 陽 一

歴史地理学第49巻5号（通巻236号）抜刷

（2007年12月）

アジア・太平洋戦争期の戦略研究における 地理学者の役割

— 総合地理研究会と陸軍参謀本部 —

柴田陽一

- I. はじめに
- II. 総合地理研究会の発足の経緯
 - (1) 地政学研究の開始
 - (2) 参謀本部からの依頼
 - (3) 皇戦会と昭和通商からの資金提供
- III. 総合地理研究会の活動状況とメンバーの変遷
 - (1) 会の活動状況
 - (2) メンバーの変遷
- IV. 総合地理研究会の研究成果
 - (1) 地政学的地誌
 - (2) 陸軍の作戦計画への関与
- V. 総合地理研究会の終焉
- VI. 総合地理研究会が陸軍の戦略研究の中で果たした役割
- VII. おわりに

I. はじめに

アジア・太平洋戦争期において、地理学者に限らず、さまざまな分野の学者が陸海軍と係わりをもったことは否定できない事実である。隣接諸分野に例を求めれば、高山岩男や高坂正顕を中心とした哲学京都学派は海軍と会合を繰り返していたし¹⁾、海軍省調査課の研究会には、哲学・政治学・社会学の名だたる学者が集い、戦争目的や「共栄圏」理念の理論化に取り組んでいた²⁾。また、国史学の

平泉澄は陸海軍との間に太いパイプをもち、全国で慰問・講演活動を行うとともに、特攻兵器の実用化に一役買っていた³⁾ことが従来の研究で明らかにされている。さらに、人類学者に注目した研究もある⁴⁾。こうした隣接諸分野の研究では、当時の学者の知的営為を、その思想と実践両側面を視野に入れてとらえようとする姿勢が顕著である。

一方、地理学に関しては、当時の地政学の思想的な側面について一定の研究業績があるものの⁵⁾、その実践的な側面、特に軍との係わりについては、まだ研究が進んでいない。海軍と係わりをもっていた日本地政学協会⁶⁾や、兵要地誌作成作業に従事した地理学者の存在⁷⁾、本土決戦に備えるため参謀本部の渡辺正少佐を中心に結成された兵要地理調査研究会⁸⁾、陸海軍の諸機関への学生の動員⁹⁾などについて、近年ようやく明らかにされ始めたところである。つまり、アジア・太平洋戦争期に、地理学者が、どのような調査研究機関に所属し、陸海軍とどのように関わっていたのか、そしてどのような仕事を担当し、その成果が陸海軍の戦略研究や植民地統治などの局面において、どのような役割を果たしたのかに関する実証研究は、緒についたばかりである¹⁰⁾。そこで本稿では、アジア・太平洋戦争期の陸軍の戦略研究において、地理学者がいかなる役割を果たしたのかを、小牧実繁

ら京都帝国大学地理学教室関係者や陸軍の軍人などから構成された総合地理研究会（通称「吉田の会」）の活動を例に考えてみたい。

「日本地政学」の名のもとに多面的な活動を展開していた総合地理研究会¹¹⁾は、戦後長い間、その存在を知られながらも、実態は解明されずにきたが、近年、会の関係者による回想の公表¹²⁾や、資料の発見¹³⁾により、会が陸軍の戦略研究の中で果たした役割が注目され出している¹⁴⁾。しかしながら、会に関する従来の研究には、次のような2つの弱点がある。

第一に、一次資料に裏づけられていないという致命的な弱点がある。竹内啓一は会と陸軍の結びつきを示す一次資料の発見とそれによる実証研究の必要性について繰り返し述べていたが、最期までそうした研究を行うことはなかった¹⁵⁾。また、久武哲也は、「渡辺正氏所蔵資料」に基づき、兵要地理調査研究会の実態を明らかにする中で、総合地理研究会にも言及しているが、同会についてはもっぱら関係者の回想やインタビューに依拠している¹⁶⁾。この点は、山野正彦も同様である¹⁷⁾。したがって、本稿では、一次資料の発見とそれに依拠した記述をできる限り試みたい。具体的には、会と陸軍を結びつけた参謀本部の高嶋辰彦の日記¹⁸⁾（以下、高嶋日記と記す）や「通称『吉田の会』による地政学関連史料」¹⁹⁾（以下、「地政学関連史料」と記す）などの同時代資料を用いる。ただ、本稿で扱う研究対象は、性質上、個人資料や機密資料などに拠らざるを得ないところが多い。とはいえ、こうした資料は終戦後まもなく焼却されたり、散逸したりしているので、現時点では、必ずしも多くの同時代資料に拠ることができたわけではない。そこで、戦後書かれた関係者の回想²⁰⁾、『続・地理学を学ぶ』に収められている関係者へのインタビューの記録²¹⁾、筆者が行った関係者へのインタビュー²²⁾などによって照合・補足するよう

つとめた。

第二に、従来の諸研究では、メンバーの変遷や、それに伴う分担地域の変化など総合地理研究会の具体的な内実について十分な考慮がなされてこなかった。またこれと関連して、特定の関係者、具体的には村上次男の回想に依拠して記述される傾向が強いという弱点がある。後述するように、会の活動は1937年から1945年までの8年間という時間の幅をもつものであったし、メンバーとその分担地域も1942年をさかいに大きく変わっている。そして、村上は1942年から会に参加したメンバーである。これらの点を考慮すれば、村上の回想にのみ依拠しがちな従来の研究は、8年間の会の活動を正しくとらえたものとはいえない。したがって、本稿では、会を8年間の時間の幅をもち、かつ流動的なものとしてとらえたい。そこで、戦後書かれた関係者の回想は、その人が実際に会に係わった時期を考慮した上で、資料として用いる。また、一人の回想のみに依拠するのではなく、複数の回想を突き合わせることにする。

このように本稿では、上記の2つの手法を用いることにより、従来の研究の弱点を克服し、会に関する事実確認作業を行う。具体的には、総合地理研究会の発足の経緯（II章）、会の活動状況とメンバーの変遷（III章）、会の研究成果（IV章）、会の終焉（V章）についてこの作業を行う。それをふまえVI章では、総合地理研究会が陸軍の戦略研究ひいては総力戦の中で果たした役割を検討する。こうした作業や検討を通して、VII章では、本稿で得られた新知見をまとめ、その地理学史研究上の意義を述べたい。

本稿で主に扱う総合地理研究会による陸軍の戦略研究への関与は、「日本地政学」の思想的な側面というよりは、実践的な側面として位置づけられる²³⁾。また、メディアを駆使し、国民の啓蒙を意図していたプロパガンダ活動が「表」で行った実践とすれば、本稿の

対象は、陸軍との間で秘密裡に行った「裏」の実践といえる。筆者が、この実践的な側面に注目しようとするのは、「日本地政学」の思想と実践の両側面を明らかにすることにより、アジア・太平洋戦争という総力戦下における一つの地理的知のあり方を立体的に把握することができると思うからである。

II. 総合地理研究会の発足の経緯

1937年に「先史地理学研究」により文学博士の学位を取得し、1938年に教授に昇任した小牧が、なぜ「日本地政学」を提唱する道を選んだのか。「日本地政学」の成立過程に関するこの問いは、これまで研究者を悩ませてきた²⁴⁾。前稿で筆者は、小牧の国際情勢の認識と彼の学問観に注目してこの問いに答えようと試みたが²⁵⁾、本章では、別の側面からこの問いにせまってみよう。

(1) 地政学研究の開始

従来の研究では、総合地理研究会の発足は1939年とされてきたが²⁶⁾、果たしてそうであろうか。会発足の経緯をみてみよう。

小牧は、「此の雑誌〔*Zeitschrift für Geopolitik*—筆者注〕が一九二四年に独逸で出ました当時日本でも大方方々へ入れられたと思ひます。私共も亡くなられました小川先生などが、之を註文して取つてをられたのを見せて戴いたのであります」と述べるように、1924年の時点でドイツ地政学に接している²⁷⁾。それは、藤澤親雄や飯本信之により、日本に地政学が紹介され出した時期に当たる²⁸⁾。1930年代半ばになると、米倉二郎、別技篤彦、松井武敏、室賀信夫、川上健三が地政学に興味をもち始め、小牧に影響を及ぼしていたようである²⁹⁾。室賀の影響として、日本の地理思想研究³⁰⁾、松井の影響として、地理学の実践性の追求³¹⁾が考えられる。また、1936年8月刊行の『地理論叢』第8輯に別技が「ラテン・アメリカにおける石油資源の地政学的意

義」を発表していることや³²⁾、日中戦争勃発直後、米倉が地政学的考察を発表しようとしたこと³³⁾も注目される。

そして、彼らは、小牧が博士論文を提出した1936年末から日中戦争が勃発する1937年7月の間に、地政学研究を開始した³⁴⁾。この時、京都帝国大学地理学教室には、1936年3月の石橋五郎教授の停年、1937年3月の米倉助手の和歌山高等商業学校への転出を受け、スタッフとして小牧助教授、室賀講師、野間助手がいた。これ以降、終戦までこの3名が教室を運営していくことになる。したがって、1937年4月に確立した「小牧—室賀—野間」という体制が打ち出した方針こそ、「日本地政学」だったのではないだろうか、筆者は推測している。

なお、この背景として、小川琢治の『戦争地理学研究』³⁵⁾に象徴される同教室関係者の政治・軍事地理学に対する関心の高さや、地理学をもって国家に奉仕したいという思い³⁶⁾があったと思われる。また村上が、地理学専攻者がフリードリッヒ・ラッツェルの*Politische Geographie*に親しんでいたことが、地政学を取り入れようとした一つの素因かもしれないと述べていることも注目される³⁷⁾。

(2) 参謀本部からの依頼

1937年から地政学研究を開始した小牧らのもとに、1938年11月に参謀本部の高嶋辰彦大佐から「政治地理学」研究の依頼が来た³⁸⁾。当時、高嶋は、参謀本部第四部第十課（戦史）³⁹⁾および第十一課（戦法）⁴⁰⁾の課長代理であった⁴¹⁾。これらの課が総合地理研究会と関係をもっていたことは、同会が担った役割を考える上で重要である。さて、依頼直後、それを受けた形で発表された文章が、「日本地政学」の必要性を強調した小牧の「地理学に志す人へ」である⁴²⁾。この事実は「日本地政学」の成立過程を考える上できわめて重要である。そして、同月17日には早くも、京都

で総合地理研究会が開かれ、高嶋も出席したことが高嶋の日記からうかがえる。高嶋の日記にみられる彼が出席した総合地理研究会に関する記述は、抜粋して表1にまとめた。このような迅速な対応からすると、会の母体となる研究グループは、依頼前から存在していたと思われる。それこそが1937年から開始していた地政学研究グループ、すなわち通称「吉田の会」であり、高嶋から依頼を機に、総合地理研究会として整備されたのではないだろうか。なぜなら総合地理研究会という名称の初出が、11月17日の高嶋日記であるからである。しかし、これは推測の域を出ない。なお、同研究会の「吉田の会」という通称は、現京都市左京区吉田で研究会を開いてい

たことから付いた名前である⁴³⁾。

翌12月になると、高嶋・小牧・川上健三・間野俊夫少佐らにより「国防地理の打合せ」が、23日に東京青山で行われた⁴⁴⁾。24日には、同じく青山で総合地理研究会が開かれ、「歴史地理より着手する」という当面の会の方針が決まった(表1)。なお、このころから高嶋の助手的役割を務めた間野の名前が、高嶋日記に頻出するようになる。

ところで、総合地理研究会は、同年高嶋が設置した「国防研究室」の外郭の研究会として位置付けられていた⁴⁵⁾。1937年から高嶋は、英国にならって国防大学を設置しよう、各方面に働きかけていた⁴⁶⁾。これは、総力戦という形をとった第一次世界大戦を受け

表1 高嶋辰彦大佐が出席した総合地理研究会に関する記述 1938年～1940年

年月日(曜日)	記述事項
1938.11.17(木)	午前京大にて桜井、肥田両大佐を打合せ、次で宮崎、羽田、中村等諸教授を歴訪す。…午後四時迄総合地理研究会(小牧博士主宰)に臨席。
1938.12.24(土)	九時青山、小牧博士以下参集せる。総合地理研究会員に対し余一場の挨拶をなし後世界情勢を説明す。昼食後も続け午後二時より研究に移る。各種の意見あり。とくに室賀信夫氏の所述異色あり。軍部に対する直言を憚らず。余却って望みを同氏に属す。結局歴史地理より看手することとなれり。(三時まで)…午後六時より軍人会館にて総合地理研究会員会食。十時帰宅す。
1939. 3. 8(水)	[間野少佐と共に] 午後一時より楽友会館にて総合地理研究会に臨む、皆熱心、考え方もわれらに近づく、夕食を会食
1939. 5.14(日)	[京都] 十時より四時半まで皇戦地誌研究会に開く
1939. 9.24(日)	九時半鈴木大将を京都駅に迎う。16D長石原莞爾中将も在り。丸物にて会長に総合地理の一同を紹介し、丸物展覧会を一覧す、正午瓢亭にて会長、理事長、田中商工会議所会頭榎並同神戸会頭、竹上副会頭、大里支配人、伊■少佐等を師団にて招待、師団側は、福栄少将、大橋中尉なり、会食後中岡、福栄、高嶋、大橋の四人にて会談、次で中岡理事長を総合地理研究会場に案内す。
1939.11.23(木)	新嘗祭…九時吉田の総合地理研、午後九時迄勉強す。同会にも光明を認めたり。
1940. 3. 2(土)	正午商工会議所昼食、一時より九時まで総合地理研究会参加
1940. 3. 3(日)	九時より一時半まで総合地理
1940. 6.22(土)	八時総合地理会、梅路氏来訪、十一時半つるやにて会食又地理研究午後七時に及ぶ、朝永、別技及室賀氏の研究発表なり、七時半祇園にて簡単なる夕食
1940. 7.31(水)	一時より総合地理研究、夜九時に及ぶ、川上、藤田両氏来会す。
1940. 9.21(土)	八時吉田神社参拝、午後総合地理研究会に出席
1940.10.28(月)	八時総合地理、藤田、川上両氏もあり進歩著し、一時に出でて
1940.11.21(木)	十時半吉田の総合地理研究所に至り渡辺大佐との顔合せをなす

注 防衛庁防衛研究所図書館所蔵の「高嶋辰彦陸軍少将日記」(昭和13～15年)から抜粋して作成した。〔 〕内の語は作成者が補充したものである。■は判読不明な箇所である。

て、国家総力戦体制の整備が必要と考えていたからであった⁴⁷。そして、1938年3月に国家総力戦を研究するため、参謀本部第一部の外郭団体設置が認可されると、彼は「総力戦研究室」を立ち上げた⁴⁸。この研究室は、翌月、名称を「国防研究室」に改め、7月から第四部の外郭団体になった⁴⁹。「国防研究室」は文部省の国民精神文化研究所とも深い関係があった⁵⁰。総合地理研究会は、この「国防研究室」を拡大させようと目論む高嶋が白羽の矢を立てた研究団体であった⁵¹。

なお、関係者の回想⁵²で、高嶋と小牧の仲介役と目されている川上健三は、同年12月に「国防研究室」に採用された⁵³。その後も、高嶋の日記に川上の名前が頻出することから、高嶋と小牧ら京都帝国大学地理学教室関係者との関係上、川上が重要な役割を果たしたことが推測される⁵⁴。

(3) 皇戦会と昭和通商からの資金提供

「国防研究室」の外郭団体と位置づけられた総合地理研究会は、皇戦会と昭和通商株式会社（以下、昭和通商と略記する）から資金提供を受けていた。皇戦会の場合、その額は、大学の助手の初任給が70円程度のときに、月400円程度であった。この多額の資金は、まとめて提供され、使用方法が細かく決められていたわけではなかったという。また、当時軍事機密扱いだった地図類も与えられたようである⁵⁵。昭和通商の場合、その額は不明だが、小牧らが昭和通商調査部から研究の委嘱をされていたこと⁵⁶、地理学教室卒業者が同社に就職した例が多数見られること⁵⁷、調査部第二課の鈴木福一を通じて資金を受け取っていたこと⁵⁸が明らかになった。

皇戦会とは、高嶋が「広範な人々に、国防学研究の必要を訴え、啓蒙の成果を挙げるため」に作った「団体や個人の参加する新組織」である。1938年10月に「企図」したものであったが、陸軍次官東条英機中将に反対さ

れ、年内に発足させることはできなかった⁵⁹。そこで、高嶋は、1939年1月11日に、発起人を教育総監部第一部神田正種少将、陸軍大学校幹事坂西一良少将として皇戦会の趣意書を書き、同月末から賛助者の署名を集めて回った。そして、会長に靖国神社宮司鈴木孝雄大将、顧問に平沼騏一郎首相、荒木貞夫文相、柳川平助興亜院総務長官をはじめ多くの人を迎え入れることに成功した（高嶋日記）⁶⁰。4月1日、「各界の世話人」に対して高嶋と小牧が説明を行った後、軍人会館において、皇戦会の発起人会が行われた⁶¹。同日、高嶋は、武藤章軍務局長や岩畔豪雄軍事課長に皇戦会の了解を得た。次いで、5月5日に青山の青年会館に皇戦会事務所を開設、5月20日に財団法人の許可を得た（高嶋日記）。この間、高嶋は、1939年3月9日付けで、参謀本部第四部第十課および第十一課の課長（兼任）に就任した。そして5月に、皇戦会常務理事となった⁶²。上述のように、会長は鈴木大将だが、設立の経緯からわかるように、皇戦会の事実上の主宰者は高嶋であり、皇戦会は「国防研究室」の外郭団体と位置づけられるものであった⁶³。そして、間野が「大阪、東京の商工会議所の理事者に接触し、特に関西経済界から資金の提供を受けることになった⁶⁴」と述べるように、皇戦会は、「国防研究室」において高嶋が促進していた総力戦研究を金銭的に支えるパトロンの性格をもつ会であった。

昭和通商は、「三井・三菱・大倉の出資により設立された国策会社で、陸軍の要請にもとづいて」おり、社長は「予備陸軍大佐」だったと浅井得一はいう⁶⁵。この昭和通商の設立総会が四谷宝亭で開かれたのは、奇しくも皇戦会の発起人会が開かれた1939年4月1日であった。設立総会には、発起人として、陸軍省から武藤軍務局長、岩畔軍事課長、石田礼助（三井物産常務）らが集まった。この中で、実質的に同社の主導権を握ることになる

のは、設立の中心となった岩畔であった。資本金は三井物産、三菱商事、大蔵商事の三財閥企業がそれぞれ500万円ずつ出資したという。同社は、最盛時には3000人近い社員を抱え、世界各地に支店網をはりめぐらしていた。「表向きの仕事としては、陸軍の旧式となった武器を中近東などの第三国に輸出する一方、タングステンなどの軍需物資を現地調達して輸入していたが、実態は諜報活動とアヘン取引を両輪とする、陸軍の完全管轄下におかれた極秘特務機関だった」ようである⁶⁶⁾。

このような皇戦会や昭和通商に総合地理研究会は資金提供を受けていた。村上次男が「金がなければ何もできへん⁶⁷⁾」というように、研究会の活動は、資金提供なしには成立しないものであった。さらに、小牧が『日本地政学宣言』を書いたのは、「小牧自身の発想」ではなく、皇戦会の賛成があったからとさえ村上はいう⁶⁸⁾。このことは、高嶋と接触した直後に小牧の「地理学に志す人へ」が発表されていることとともに、「日本地政学」の成立過程を考える上で重要である。

以上、会の発足の経緯を地理学教室側、参謀本部側の双方に注目し、明らかにした。

Ⅲ. 総合地理研究会の活動状況とメンバーの変遷

(1) 会の活動状況

総合地理研究会が開かれた場所は、皇戦会などから提供された資金により、吉田山西麓の吉田上大路町（京大正門の南東方）に借りた民家であった⁶⁹⁾。民家には、提供された資金で購入した膨大な数の図書が置かれていた⁷⁰⁾。村上の証言⁷¹⁾によれば、そのうち洋書の購入先は丸善であったが、古いものしかなかったという。言語としては、ドイツ語の本が割合多く、地政学の一つと考えられる国土計画の本も多数あった。また、研究室よりも気安く図書を買うことができ、終戦までに

1万冊以上を購入したという。なお、図書の会計は三上正利や岡本信太郎が務めていたという。民家には、いすや机など簡単な書き物をするスペースも設けられており、小牧が許可した者に限っては、いつでも行くことができた。また、民家には地図類や報告書が保管され、管理人も雇っていたようである⁷²⁾。

会の開催について、村上は、週に1回、木曜日の午後2時から開かれ6時ごろには終わったこと、メンバーが順番に研究結果を発表し、討議を繰り返したこと、それは終戦まで続けられたことを、回想している⁷³⁾。しかし、会のメンバーではないが、池田師範学校で別技と同僚であった山口貞雄は、会は隔週の土曜日に開かれたと述べる⁷⁴⁾。山口の記述が別技から得た情報に依拠しているとする、別技と村上とでは、会に参加した時期が異なることから⁷⁵⁾、二人の記述の齟齬は、会の開催頻度が時期により異なっていた可能性を示唆している。また、地理学教室関係者のみで開かれる会と、高嶋ら陸軍の軍人も参加する会とでも、開催頻度が異なっていた。なお、表1からわかるように、軍人も参加する会は、依頼された研究の成果を発表する場であったのに対し、教室関係者のみで開かれる会は、研究の中間報告や意見交換など、さまざまな目的で開かれていたと考えられる。

陸軍の軍人も参加する会は、浅井の回想によれば、月1回くらいの割合で開かれ、高嶋のほか、吉田元久中佐、間野俊夫中佐なども参加し、指導と助言をしていたという⁷⁶⁾。また、表1によれば、会は1938年に2回、1939年に4回、1940年に5回開かれていること、場所は、第2回目を除き、すべて京都で開かれていることがわかる。また、高嶋と間野以外に、川上健三、藤田清らが会に1回以上参加していることや、会のメンバーが鈴木大将や石原莞爾第十六師団長に紹介されていることがわかる。さらに、3回目の研究会（1939年3月8日）の「皆熱心、考え方もわれらに

近(ママ)ずく」や、6回目の研究会（同年11月23日）（図1）の「同会にも光明を認めたり」という記述から、高嶋ら陸軍側と小牧ら地理学教室関係者の思想的距離が縮まっていった様子が見受けられる。

なお、小牧は、教室関係者であっても許可した者以外には、また軍人でも皇戦会以外の人には、民家の存在を隠していたという⁷⁹⁾。小牧は、会を秘密にすることに神経をとがらせていた⁷⁸⁾。小牧のこの行動は、皇戦会のメンバー四王天延孝の影響であり、フリーメソンのような団体に会のことを知られてはならないと考えていたからだと村上はいう⁷⁹⁾。

(2) メンバーの変遷

総合地理研究会は、メンバーにしか、その活動が知らされていない秘密の研究会であっ

た。それゆえ、メンバーを特定することは、会の研究成果を検討するためにも重要な作業である。

地理学教室関係者のメンバーとして確定できる人物は、次の18名である⁸⁰⁾。すなわち、京都帝国大学の卒業年順に記すと、小牧実繁、米倉二郎、別技篤彦、川上健三、室賀信夫、松井武敏、朝永陽二郎、御子柴幸一、浅井得一、野間三郎、村上次男、和田俊二、浅井辰郎、柴田孝夫、内藤玄匡、川上喜代四、三上正利、岡本信太郎である。また、メンバーであったとは確定できないが、会の活動との係わりが推測される人物は、次の7名である⁸¹⁾。すなわち、同じく卒業年順に、小葉田亮、中田栄一、西田和夫、藤野義明、河地貫一、大島襄二、船越謙策である（表2）⁸²⁾。秘匿性を重んじる会の性格を考慮す



図1 京都市吉田上大路町の民家で行われた総合地理研究会の参加者（1939年11月23日）

所蔵者故浅井辰郎氏の許可を得、ここに掲載するものである。前列左から室賀信夫、小牧実繁、高嶋辰彦大佐、間野俊夫少佐、米倉二郎。中列左から浅井辰郎、別技篤彦、川上健三、松井武敏、御子柴幸一。後列左から朝永陽二郎、内藤玄匡、野間三郎、柴田孝夫。

表2 総合地理研究会のメンバーと
その周辺の人物の略歴

メンバーであったことが確定できる人物

小牧実繁 (1898~1990, 日本)
22年3月 卒業 「海岸の研究—河北潟を中心に
して—」
37年6月 博士論文「先史地理学研究」が教授会
を通過
38年3月 京都帝国大学教授
43年1月 大日本言論報国会理事

米倉二郎 (1909~2002, 中国・満州)
31年 卒業 「筑後川下流平野の開発」 助手
37年4月 和歌山高等商業学校講師
38年 同校教授
42年 山口高等商業学校教授
44年 南方派遣軍総司令部参謀部第二課調査要員
(後に兵要地誌班)として従軍(現職のまま、
佐官待遇)
シンガポール(~44年5月ごろ)
その後、マニラ、サイゴン、ハノイ(2ヶ月く
らい)、ユエ(王朝の図書館で文献収集)に滞
在
サイゴンで終戦

別技篤彦 (1908~1997, 蘭領東インド, 太平洋)
32年3月 卒業 「西濃平野に於ける輪中の地理
学的研究」
32年4月 大阪商科大学予科講師
37年4月 同大学専任講師
38年3月 同大学予科教授兼高等商業部教授
41年12月 南方軍司令部嘱託 調査班を組織 青
山の参謀本部分室で勤務
42年3月 ジャワへ出発 軍政監部に所属 南方
文化研究室(オランダ王立自然科学協会図書
館)の室長
45年4月 ジャカルタ女高師の教授を兼任

川上健三 (1909~1995)
33年3月 卒業 「印旛沼の地理学的考察」
台湾で中学校教師、のち台南州視学官として教育
行政に従事
38年12月 参謀本部第四部国防研究室のち総力戦
研究所
42年11月 興南錬成院錬成官
43年11月 大東亜錬成院錬成官

室賀信夫 (1907~1982, インドシナ, 北アメリカ)
33年3月 卒業 「愛鷹南麓誌」
大学院(日本地理学史を研究テーマにする)
37年 講師
43年10月 助教授
44年から療養に専念

松井武敏 (1910~1992, 西南アジア(アフガニスタ
ン, イラン, イラク, アラビア), ニューギニア)
33年3月 卒業 「生産現象を中心とする紀北の
経済地理構成の一考察」
33年4月 大学院入学(38年3月退学) 同志社
大学予科講師(~34年3月)
34年3月 甲南高等学校教授
42年3月 和歌山高等商業学校教授

44年3月 大分高等商業学校教授
朝永陽二郎 (1908~1987, アフリカ)
34年3月 卒業 「知多半島に於ける生産現象の
地理的一考察」
34年5月 大学院入学(39年5月退学)
39年4月 文学部副手・同志社大学予科講師(~
42年3月)
42年3月 甲南高等学校教授

御子柴幸一 (1909~1960)
35年3月 卒業 「富士西南麓の地誌学的研究」
35年4月 同志社大学予科講師, 同志社中学校教
諭
38年11月 東亜研究所嘱託, 第五部勤務(英国
班)
39年4月 東亜研究所副調査員
43年9月 大政翼賛会宣伝部副部長, 興亜総本部
員

浅井得一 (1913~2003, インド)
36年3月 卒業 「本邦諸都市の人口地理学的考
察」
立教中学校教諭(40年まで4年間)
40年4月 大学院学生兼副手(無給)
41年1月 人文科学研究所嘱託(専任)
満州へ出張 満州国総務庁企画処 人口配置計
画の立案 「満州国諸都市の人口増減について」
41年12月 帰国
42年9月 参謀本部から電報で呼び出される
42年12月8日 陸軍司政官 ビルマ軍政監部付
43年1月 客船兼洋丸で宇品を出帆
シンガポールに着くが、空路ラングーン入りは
不可 佐野幸康司政官とともに工事中の泰緬鉄
道のルートをトラックや徒歩で陸路ラングーン
へ
43年4月中旬 ラングーンに着任(タイから陸路
で) ビルマ方面軍参謀部第二課
43年10月ごろ シンガポールへ 南方軍総司令部
参謀部第一課(作戦・情報)へ転勤 新設され
た未占領地域調査班(特別調査班)に所属, 西
南支部の調査を担当
43年末 またビルマへ ラングーンでバーモ暗殺
未遂事件を起こし、軟禁される
45年4月末 ラングーンを脱出してモールメンへ
モールメンで終戦

野間三郎 (1912~1991, トルコ・シリア・パレスチ
ナ・ヨーロッパ, フィリピン)
36年3月 卒業 「オスカー・ベッシェル」
36年3月 副手
37年3月 助手
41年3月 講師

村上次男 (1911~2002, 太平洋諸島, インド, 中南
米)
36年3月 卒業 「備後因ノ島研究」
36年8月 鞍山中学校教諭(~42年3月)
42年6月 大学院入学
42年9月 副手
43年4月 文学部教務, 龍谷大学予科講師(とも
に~46年3月) 龍谷は野間の後任

和田俊二 (1913~1989, オーストラリア)
37年3月 卒業 「生駒山脈西麓に於ける水車の地理学的研究」
37年3月 副手 (~43年9月)
38年1月 臨時召集 満州へ
38年7月 兵役免除 仙台にて療養生活
40年5月 地理学教室に復帰 教室員の研究地域の分担に従い、オーストラリア研究を開始
42年4月 同志社大学予科講師ならびに同志社女子専門学校講師を嘱託される (~43年5月)
43年5月 彦根高等商業学校講師 (経済地理学・外書講読・演習担当)
43年9月 京都帝国大学文学部教務を嘱託される
44年9月 滋賀へ引越す
44年10月 彦根経済専門学校教授 (経済地理学・東亜地政学・講読担当)
45年3月 彦根工業専門学校教授 (ドイツ語・人文科学担当)

浅井辰郎 (1914~2006)
39年3月 卒業 「北支那農業に於ける気候的災害に就て」
40年 建国大学助手
44年 応召

柴田孝夫 (1913~2002, 中南米)
39年3月 卒業 「武蔵国見沼代用水の研究」
大学院入学 副手 のち、東京陸軍幼年学校教授

内藤玄匡 (1915~2005)
39年3月 卒業 「十州塩田稼業の地理学的考察 -特に讃岐塩業に就て-」
39年4月 大学院入学
40年 応召

川上喜代四 (1916~1982, 極地, 北アメリカ)
40年3月 卒業 「航空輸送の地理学的研究」
副手
41年 海軍教授嘱託
42年 海軍教授 滋賀海軍航空隊ほか
45年 水路部修技所教官

三上正利 (1914~1989, シベリア, 蒙疆, チベット, ビルマ)
40年3月 卒業 「清時代の支那地図-概観並に諸問題-」
40年4月 大学院入学 (41年3月退学)
41年3月 地理学研究室助手
43年10月 大学院特別研究生

岡本信太郎 (啓志) (1912~1980, ユダヤ問題, インド)
41年3月 卒業 「猶太民族の一地理学的考察」
大学院入学 副手 (~43年10月)
43年10月 地理学研究室助手 (~21年3月)

研究会の活動との係わりが推測される人物

小葉田亮 (不明~1945?, アラスカ, アリュートン列島?)
35年3月 卒業 「本邦旧城下町の一考察」
滋賀県立長浜女学校
40年頃 兵庫県師範学校

44年頃 応召
45年頃 戦死

中田栄一 (1917~)
41年3月 卒業 「日本沿岸に於ける社会の地縁 -主として海村を中心として見たる-」
41年度 総合地理研究会にオブザーバーとして参加
42年 応召
43年 国民精神文化研究所

西田和夫 (1919~1994)
41年3月 卒業 「朝鮮米の地理学的考察」
大学院入学
ジャワ軍政監部

藤野義明 (1909~1969, タイ)
41年3月 卒業 「泰国の交通構造-日本地政学の立場より-」
42年12月 陸軍少佐になる

河地貫一 (1915~不明, オーストラリア)
41年12月 卒業 「濠洲の地理学的考察-白濠主義を中心として-」
42年1月 総務庁高等官試補
42年2月 応召 (~同年12月)
43年1月 京都帝国大学文学部副手兼教務嘱託
43年11月 昭和通商株式会社調査部嘱

大島襄二 (1920~)
43年9月 卒業 「アメリカ大陸問題の展開」
大学院入学 同志社女学校の非常勤
44年7月 応召

船越謙策 (1909~1996)
43年9月 卒業 「波斯湾の地政学的考察」
大学院入学
45年7月 広島高等師範学校

注
1) 名前の後ろの括弧には、生没年と分担地域を示した。ただし、分担地域は判明している場合のみ記した。
2) 表作成のために参照した資料は、①浅井辰郎編「野間三郎先生追悼文集」、理論地理学ノート8、1992、119~153頁。②浅井辰郎「別枝篤彦名誉会員のご逝去を悼む」、地理学評論70、1997、553~554頁。③浅井得一「一地理学徒の経験」、新地理2-4、1948、30~35頁。④浅井得一「御子柴さんの思い出」、新地理8-4、1960、68~69頁。⑤同「パーモ暗殺未遂事件についての証言(上)」、政治経済史学144、1978、1~14頁。⑥同「パーモ暗殺未遂事件についての証言(下)」、政治経済史学145、1978、1~18頁。⑦同「地理学徒の覚え書き」、国土館大学地理学会誌2、1980、1~7頁。⑧浅井得一「日本地理教育学会私記」、新地理47-3-4、2000、3~6頁。⑨味澤成吉「浅井得一先生の御逝去を悼む」、新地理51-1、2003、96頁。⑩大島襄二「『八洲会』のごとも」、京都大学地理学談話会会報2、1991、1~2頁。⑪岡田俊裕「十五年戦争期の米倉二郎」、地理科学53、1998、73~96頁。⑫北川建次「船越謙策先生の逝去を悼む」、地理科学52、1997、69~70頁。⑬史学地理学研究室「朝永陽二郎先生を送ることば」、甲南大学紀要文学編28、1977、57~60頁。⑭柴田陽一「小牧実策の著作目録と著述活動の傾向」、歴史地理学223、2005、42~63頁。⑮鈴木宗憲「追悼 岡本信太郎教授」、金沢経済大学論集14-2、1980、93~95頁。⑯地理学談話会『昭和十三年六月会員名簿』地理学談話会、1938。⑰地理学談話会『昭和十九年六月 地理学談話会名簿』地理学談話会、1944。⑱日本地図資料協会編『室賀信夫先生追悼文集』、日本地図資料協会、1988。⑲松垣松夫「御子柴幸一君の死を惜しむ」、新地理8-4、1960、67~68頁。⑳久武哲也「村上次男名誉会員のご逝去を悼む」、兵庫地理48、2003、1~3頁。㉑別枝篤彦「歩み来し跡-自撰年譜抄-」(ラフレシアの会編『愛-別枝篤彦追悼集-』ラフレシアの会、1999)、8~26頁。㉒正井泰夫・竹内啓一編『続・地理学を学ぶ』、古今書院、1999。㉓村上次男「回想は続く」(私家版)、1993。㉔森川洋「米倉二郎先生の御逝去を悼む」、地理学評論76A-4、2003、i~ii頁。㉕矢野崎孝雄「岡本啓志先生のご逝去を悼む」、歴史地理学111、1980、38頁。㉖矢澤大二「川上喜代四君の逝去を悼む」、地学雑誌92、1983、135~136頁。㉗和田俊二「経歴と著作目録」、彦根論叢162・163、1973、206~212頁。㉘「松井武敏教授略歴-著作主要論文」、名古屋大学文学部研究論集62、1974、1~5頁。㉙「三上正利教授略歴-著作目録」、歴史学・地理学年報2、1978、1~4頁。㉚「浅井辰郎教授略歴-著作目録」、お茶の水地理21、1980、5~15頁。㉛「河地貫一教授略歴-著作目録」、経営と経済164、1982、229~231頁であり、内藤、中田氏からの私信も参照した。

ると、この両者のちがいは重要である。そして、彼らは会に参加、あるいは係わった時期がそれぞれ異なっている（図2）。

図2から、参謀本部より依頼が来た1938年から終戦まで、常に会に参加できたメンバーは、京都帝国大学地理学教室のスタッフである小牧、室賀、野間の3人だけであることがわかる。また、1942年以前と以後では、大きくメンバーが変動していることもうかがえる。端的にいうと、小牧が会を設立するのに影響を与えたと目される米倉、別技が、1942年以後、会に参加しにくい、あるいは参加不

可能な状態に陥った。代わって、三上、岡本、村上らがこの前後から会に参加するようになった。そして、1944～45年の会には、「後では交通が不便になってきてね、しまいにはもう京都に住んでるものしか出られなくなった」と村上が述べるように⁸³⁾、京都帝国大学のスタッフである小牧（教授）、室賀（助教授）、野間（講師）、村上（文学部教務）、三上（大学院特別研究生）、岡本（助手）しか参加していなかったのである（図2）。

このように会のメンバーは、時期によって

名前（卒業年）	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945年
小牧実繁（1925）	—	—	—	—	—	—	—	—
米倉二郎（1931）	—	—	—	—	—	—	—	—
別技篤彦（1932）	—	—	—	—	—	—	—	—
川上健三（1933）	—	—	—	—	—	—	—	—
松井武敏（1933）	—	—	—	—	—	—	—	—
室賀信夫（1933）	—	—	—	—	—	—	—	—
朝永陽二郎（1934）	—	—	—	—	—	—	—	—
小葉田亮（1935）	—	—	—	—	—	—	—	—
御子柴幸一（1935）	—	—	—	—	—	—	—	—
浅井得一（1936）	—	—	—	—	—	—	—	—
野間三郎（1936）	—	—	—	—	—	—	—	—
村上次男（1936）	—	—	—	—	—	—	—	—
和田俊二（1937）	—	—	—	—	—	—	—	—
浅井辰郎（1939）	—	—	—	—	—	—	—	—
柴田孝夫（1939）	—	—	—	—	—	—	—	—
内藤玄匡（1939）	—	—	—	—	—	—	—	—
川上喜代四（1940）	—	—	—	—	—	—	—	—
三上正利（1940）	—	—	—	—	—	—	—	—
岡本信太郎（1941）	—	—	—	—	—	—	—	—
中田栄一（1941）	—	—	—	—	—	—	—	—
藤野義明（1941）	—	—	—	—	—	—	—	—
西田和夫（1941）	—	—	—	—	—	—	—	—
河地貫一（1941.12）	—	—	—	—	—	—	—	—
大島襄二（1943.9）	—	—	—	—	—	—	—	—
船越謙策（1943.9）	—	—	—	—	—	—	—	—

図2 総合地理研究会のメンバーとその周辺の人物の動向

注 実線（—）は、総合地理研究会に参加したと確定できる時期、点線（……）は、会に参加できなかった時期、あるいは参加できたかどうかははっきりしない時期を意味する。点線の箇所には、そのように考えられる理由を記した。また、小葉田および中田以下の人物は、会のメンバーであったとは確定できないが、会の活動との係わりが推測される時期を、破線（- -）で示した。

かなり変動している。したがって、関係者の回想やインタビューによる証言は、その人が参加した時期をふまえて受け止める必要がある。従来の研究は、この点への配慮が不十分であった。

陸軍側のメンバーについては、1938年末から1942年ごろまでしか特定作業が進んでいない。高嶋辰彦は、1940年12月2日、台湾歩兵第一聯隊長（台湾軍、第四十八師団）に転ずることになる。そして、皇戦会の常務理事の任は、総力戦研究所の渡辺渡大佐に引き継がれた。1940年11月20日、高嶋は大阪で開かれた皇戦会賛助会にて、渡辺を紹介し、翌21日、「吉田の総合地理研究所」で会のメンバーと渡辺の顔合わせを行っている（高嶋日記）。高嶋は、その後1941年10月に再び参謀本部に戻るものの、まもなく第16軍高級参謀として南方に出征していった⁸⁴⁾。このように高嶋が日本を離れざるを得なくなった理由は、関係者によれば、「国防研究室」や総合地理研究会などの参謀本部の外郭団体において高嶋が促進した総力戦研究が、陸軍省などから「目障り」「無用」と目されていたことによるという⁸⁵⁾。そこで、高嶋の台湾出征後、「国防研究室」はまもなく解散となり、その業務は、1940年9月に設置された総力戦研究所に引き継がれていくことになる⁸⁶⁾。

一方、渡辺渡は、1941年11月に第二十五軍軍政部付となり、山下奉文軍司令官のもとでマレー軍政の基礎を築く仕事に従事することになったものの、1943年3月に歩兵学校付となって帰国し、1944年11月の中国赴任まで日本に滞在している⁸⁷⁾。したがって、渡辺は1941年11月以降にも総合地理研究会と係わりをもっていた可能性がある。

間野俊夫は、高嶋が一時帰国した1941年末にも、変わらず総合地理研究会と係わりをもっていたことがうかがえる（高嶋日記）。間野は「国防研究室」の解散後、教育総監部を経て、1942年3月に総力戦研究所員となっ

た。また、参謀本部嘱託として「国防研究室」で研究に従事し、その後教育総監部や陸軍大学校で働いていた藤田清は⁸⁸⁾、1941年10月刊行の米倉の『東亜地政学序説』を添削した一人であるが⁸⁹⁾、彼がその後、会と係わりをもっていたかは不明である。最後に、吉田元久は、ビルマ攻略作戦当時の第十五軍の参謀で、1942年5月に内地に帰還した後、総合地理研究会と係わるようになった⁹⁰⁾。

以上、総合地理研究会の開催場所、頻度、種類、資金の使い道、および地理学教室と陸軍それぞれのメンバーの変遷を明らかにしてきた。

IV. 総合地理研究会の研究成果

総合地理研究会は、参謀本部の依頼や、皇戦会と昭和通商からの資金提供を受けて、世界諸地域の地理学的研究を行った。それは、「東洋大陸及沿太平洋印度洋政治地理学並に軍事地理学は、皇戦国策策定のために最も具体的に必要なる学問である⁹¹⁾」という高嶋の考えを反映したものであろう。また、1930年代後半は、アジアを「解放」し、各地の経営方針を樹立するため、アジアの地誌が求められた時代であったこと⁹²⁾や、世界諸地域の地理学的研究が「来るべき世界大戦」において「戦局の理解に重要な役割をもつ」と考えられたこと⁹³⁾もその理由としてある。このような背景のもと行われた会の研究成果として、地政学的地誌と、陸軍の作戦計画への関与があった。

(1) 地政学的地誌

総合地理研究会の地政学的地誌とは、「全日本国民をして、欧米によつて狭められたる世界に対するその視野を広くひらかしめ、皇戦の真意義を悟らしむる役目」をもつ「総力戦の一部」としての地誌であった。また、単なる「現在ある姿の記述」とどまりがちだった旧来の地誌を革新し、世界各地の

「本来ある可き姿の把握」や「将来あらしむ可き姿の描出」を日本という主体の立場から行おうとした地誌であった⁹⁴⁾。総力戦研究のため設置された「国防研究室」の外郭団体である総合地理研究会は、国民の地理認識に関する啓蒙や精神昂揚を意図し、日本の主体性を明確にした地誌を、さまざまなメディアに発表した⁹⁵⁾。これにより会は、総力戦、特にその中の思想戦の一翼を担ったといえよう。

こうした地政学的地誌として、『世界地理政治大系』(表3)⁹⁶⁾、『新世界叢書』⁹⁷⁾、『朝日時局新輯』⁹⁸⁾というシリーズものや、『大東亜地政学新論』⁹⁹⁾、『世界新秩序建設と地政学』¹⁰⁰⁾といった書籍のほか、『新若人』誌上に連載した「新世界地誌」¹⁰¹⁾など雑誌や新聞に掲載されたものがある¹⁰²⁾。

この地誌を執筆するに当たり、小牧は、メンバーそれぞれに一定の地域を担当させ

た¹⁰³⁾。これは、次節で検討する作戦計画の担当地域とも一致している。メンバーの変遷を考慮すると、1940年に決められたと推測される初期の担当地域を示せば、小牧は日本、米倉は満洲・支那、別技は蘭領東インドと太平洋諸島、松井は西アジア(アフガニスタン・イラン・イラク・アラビア)、室賀はインドシナ(仏領インドシナ・タイ・ビルマ・マレー)、朝永はアフリカ、浅井得一はインド、野間はトルコからヨーロッパ、和田はオーストラリア、柴田は中南米¹⁰⁴⁾、川上喜代四は極地と北アメリカ、三上はシベリア・新疆・チベットとなる(表2、表3)。

後から加わったメンバーにもそれぞれの担当があった。1942年4月から研究会に参加した村上は、同年3月にジャワへ発った別技が担当していた太平洋諸島を担当することになった¹⁰⁵⁾。そして、1943年1月にインド担

表3 『世界地理政治大系』(白揚社)の構成と刊行状況

予定の内容(全15巻)	執筆予定者	刊行年月
日本	小牧実繁	—
満洲・支那	米倉二郎	1944.6
印度支那(仏印・タイ・ビルマ・マレー)	室賀信夫	1941.11 ¹⁾
蘭領東印度	別技篤彦	1941.9 ²⁾
太平洋	別技篤彦	—
濠洲	和田俊二	—
シベリア・蒙疆・西藏	三上正利	—
印度	浅井得一	1942.7
アフガニスタン・イラン・イラク・アラビア	松井武敏	—
土耳其・シリア・パレスチナ	野間三郎	1942.11 ³⁾
欧羅巴	野間三郎	—
アフリカ	朝永陽二郎	—
北アメリカ洲	川上喜代四	—
中南米	柴田孝夫	—
北極と南極	小牧実繁・川上喜代四	1942.3

注

- 1) 刊行時の表題は『印度支那(仏印・タイ・ビルマ・英領マレー)』である。また、1942年2月に訂正三版が刊行されている。
- 2) 刊行時の表題は『蘭領印度』である。
- 3) 刊行時の表題は『土耳其、シリア、パレスチナ、トランス・ヨルダン』である。

当の浅井得一がビルマへ発った後は、その地域も村上が担当した¹⁰⁶。また、柴田が担当していた中南米も、村上に担当が替わった¹⁰⁷。1941年3月の卒業後、会の活動と係わりをもつようになったと推測される藤野は、タイを担当していた¹⁰⁸。同じく1941年3月の卒業後メンバーに加わった岡本は、地域こそはつきりしないが、ユダヤ問題を担当していたと思われる¹⁰⁹。

また、会に参加できるメンバーが減少してくると、初期の担当地域に加え、ほかの地域も担当するようになった者がいる。室賀は北アメリカ、野間はフィリピン、三上はビルマ、岡本はインドに関する著作や発表を1943年以降に行っている¹¹⁰。このようにメンバーの出入りとともに担当地域も変化している(表2)。

担当地域に関して、もう一つ注意すべきことは、会が取り扱う「地域の軽重」が考えられていたことである¹¹¹。別技は、「第一次的には皇戦圏内の各地域」を取り扱い、「第二次的には『彼を知る』意味に於て旧秩序国家自身」に関する研究に進むべきという¹¹²。日本の地理的位置や政策を考慮すれば当然とも思われるが、会の研究は実際この順に進められることになったとみられる。したがって、「旧秩序国家」とされた欧米に関する会の研究成果は、ほとんど公表されることがなかった¹¹³。

さて、地政学的地誌の担当地域が決まった1940年の9月に、小牧は、卒業論文で外国、特に東南アジアの問題を扱うよう学生に指示を出した¹¹⁴。この指示により、1940年度卒業生が急遽テーマ変更して以後¹¹⁵、卒業論文のテーマに諸外国に関する地政学的研究やアジア諸地域の民族問題や資源問題が選ばれるようになる(表4)。中田によれば、この指示は、役に立つ地理学を目指す小牧の意図が反映されたものだという¹¹⁶。また、小牧は地政学的地誌作成の基礎作業を学生に担わ

せようとしたと考えられる¹¹⁷。

ところで、地政学的地誌は、提供された資金により購入した潤沢な外国図書などを使用した「詳しい文献研究」の成果であった¹¹⁸。皇戦会を通して参謀本部から入手した軍事機密に係わる大縮尺の地形図類¹¹⁹も、地誌作成に使用されたと目される。村上は、この地政学的地誌における注目すべき見解として、室賀のアメリカ論や野間のヨーロッパ論があったと回想している¹²⁰。

(2) 陸軍の作戦計画への関与

村上は、参謀本部から調査の依頼を小牧が受け、ほかのメンバーにより具体化するという形をとっていたという¹²¹。地図類などの物質的なもののほかに、資金や情報まで必要なものはすべて軍から支給されていた¹²²。その上で、会のメンバーは、戦地における兵要地誌図の作成、現地の地形・気象・海域状況の判断に基づく戦況の展開の想定といった作業を行っていた¹²³。こうした作業に基づいた成果は、研究会で報告された後、報告書としてまとめられた。報告書の内容は「マル秘」扱いであり、借りた民家に保管されていたが、戦後その多くは焼却されたという¹²⁴。

したがって、会が関与した作戦計画を知る手段は、現時点では、関係者の回想¹²⁵と、近年発見された報告書の一部(「地政学関連史料」, 1939年12月から1941年6月までの報告書を含む)に多くを拠らざるを得ない。ただし、「地政学関連史料」と公表された地政学的地誌を照合すると、日本がとるべき具体的政策を述べた結論部分以外は公表されている例があった¹²⁶。また、地政学的地誌における小牧らの執筆姿勢は、具体的政策については、「事実を基礎にいたしまして皆様が御自身で考へていただく¹²⁷」というものであった。したがって、小牧がいうように、「日本地政学、皇戦地政学の真の結論が、皇

表4 京都帝国大学地理学教室卒業論文題目 1937~1944年

提出年月	氏名	論文題目
1937年3月	衣川芳太郎 杉村正治郎 中江 健 和田俊二	高距一千米以上に於ける日本アルプス地方の聚落到就いて エラトステネスの地理学 高知平野の地理的研究—特に人口を中心として— 生駒山脈西麓に於ける水車の地理学的研究
1938年3月	伊藤 博 佐伯英二 下村数馬 中森増三 並河由則 西村陸男	天草諸島の人口—人口の地理学的意義についての—考察— 三島群島の人口に就いて 台湾北部の茶に就いて 北摂の経済地理学的研究* 出雲海岸地帯の水産地理学的考察 台北市の地理学的研究
1939年3月	浅井辰郎 柴田孝夫 内藤玄匡	北支那農業に於ける気候的災害に就て 武蔵国見沼代用水の研究 十州塩田稼業の地理学的考察—特に讃岐塩業に就て—
1940年3月	川上喜代四 都子 屋 三上正利	航空輸送の地理学的研究 南洋華僑に就いて 清時代の支那地図—概観並に諸問題—
1941年3月	岡本信太郎 中田栄一 西田和夫 林 宏 藤野義明	猶太民族の—地理学的考察 日本沿岸に於ける社会の地縁—主として海村を中心として見たる— 朝鮮米の地理学的考察* 砺波平野の人文地理学考察* 泰国の交通構造—日本地政学の立場より—
1941年12月	阿部正道 池田光二 植村元覚 大田原尚清 河畑文朗 河地貫一 河野通博 曾田紀一郎 戸川俊正 堀川 侃	泰国林産資源の日本地政学的考察 南米国境問題の研究* 支那に於ける綿業の地理学的考察* 西太平洋に於ける軍事地理的研究* 鎌倉時代の歴史地理学的研究* 濠洲の地理学的考察—白濠主義を中心として—① 湖広低地治水の意義—地政学的考察— 満洲開拓民問題の研究* 比律賓群島の地政学的考察*② 印度支那に於ける交通組織の新構成*③
1942年9月	石田 寛 今井次男	蒙古—日本地政学的考察—* 印度洋について*
1943年9月	大島襄二 川喜田二郎 河合喜久男 小池洋一 斎藤晃吉 三田民夫 伴 豊 船越謙策	アメリカ大陸問題の展開* 東北亜細亜の地政学的考察 日本地政学より見たる南米の性格—独立問題を中心として—* パレスチナ問題の地政学的考察 インドネシア民族の生成* 交通上より見たるイランの地位* 大陸辺境の民族政策 波斯湾の地政学的考察*
1944年9月	小糸伸一 野澤信韶	アメリカ合衆国に於ける人種問題と国民の形成 亜細亜の鉄鉱業の大東亜的編成*

注

1) 『史林』に基づき作成した。

2) 昭和通商株式会社に就職した人物は、名前をゴシック体にした。

3) 京都大学文学研究科図書館ないしは総合博物館に保管されている卒業論文は右に*をつけた。

4) 卒業論文が昭和通商あるいは、他の人の名義で発表された場合は、右に番号を付し、以下に発表先を示した。①昭和通商株式会社調査部『濠洲の地政学的考察—白濠主義を中心として』(調第20号)、昭和通商、1942。②小牧実繁「南太平洋の地政学—フィリピンに重点を置いて—」、大洋4-2、1942、26~33頁。同「フィリピンの地理」、文藝世紀4-2、1942、16~20頁。③昭和通商株式会社調査部『日本地政学ノ立場ヨリスル印度支那ニ於ケル交通組織ノ新構成』(調第22号)、昭和通商、1942。

国日本の作戦に関し、結局また皇軍の機密に係るに至るべきは必然であり、従つて又、日本地政学の全結論が新聞雑誌等の如き公開の機関に公表せられる如きことは、実は当初より考へられないことであつた¹²⁸⁾」のであろうが、公表された文章から小牧らが考えていた具体的政策を推考することは、全く不可能なわけではない。この点にも留意し、以下、会が関与した作戦計画について見てみよう。

まず、1938年の安慶作戦、武漢作戦において米倉の地政学的考察が軍部に何らかの形で参考にされたようである¹²⁹⁾。次に、1939年12月、会の報告書として、室賀の「印度支那半島に於る英仏の侵略とその政策」が確認できる¹³⁰⁾。これは同年7月の北部仏印進駐を受けて行われた研究であろう。1940年12月には、「シンガポールの軍事地理的考察」が確認される¹³¹⁾。この室賀による報告は、1942年2月に実際に行われたシンガポール攻略作戦を最初に指摘したものであつた¹³²⁾。1941年7月の南部仏印進駐の直前には、サイゴン港の地政学的位置に関する室賀の報告が行われている¹³³⁾。

アジア・太平洋戦争開戦後の1942年には、「ニューギニア島をいかにして制圧するかの考察」が村上によつて行われた¹³⁴⁾。1943年には、武漢地方から四川盆地への戦略図を作成した。村上によれば、「この辺りの地形・歴史・産業などから総合的に判断して、それを図示」したという¹³⁵⁾。また、「参考地図として、航空機のための大きな多色刷りのもの¹³⁶⁾」が提供された。

1945年に入ると、会のメンバーは、兵要地理調査研究会¹³⁷⁾に加えられ、本土決戦に関する作戦計画に係わつた。そして、『米英「ソ」ノ東亜政策ノ究明』と『帝国本土ニ於ケル要域観察判断』という2つの報告書を作成した¹³⁸⁾。

V. 総合地理研究会の終焉

終戦後まもなく、総合地理研究会は、民家に保管されていた本や資料、報告書などをすべて処分したとされている¹³⁹⁾。1945年10月にGHQが小牧のもとを訪れ、戦略図を再び作成するよう求めたとき、彼はもう資料がないので作れないと断つたという¹⁴⁰⁾。その後、会のメンバーの中で、小牧、米倉、浅井得一、村上はそれぞれ次のような理由で公職追放・教職追放された。小牧は教室の片付けを済ませた後、12月27日に辞表を提出し、大学を去っていたが¹⁴¹⁾、後に大日本言論報国会の理事を理由に公職追放された¹⁴²⁾。米倉は『東亜地政学序説』および『満洲・支那』執筆などのため¹⁴³⁾、浅井は『印度洋』執筆のため¹⁴⁴⁾、村上は「ハワイの姿」執筆のため¹⁴⁵⁾教職追放された。また、小牧の後を追つて1946年に辞職した室賀と野間も、教職に就くことはできなかった¹⁴⁶⁾。しかし、松井や和田のように、追放と無縁な者もあり、会のメンバーであつたことが追放の直接の理由とされたのではない¹⁴⁷⁾。

1951年のサンフランシスコ講和会議の後、公職追放・教職追放は解除された。教職から離れていた会のメンバーも、終戦まで勤めていた大学に再就職した例はないとはいえ、再び大学の教授職に就いた。滋賀大学に職を得た小牧は歴史地理学、民俗学に、長い闘病生活を経て東海大学教授になった室賀は地図学史に、立命館大学や金沢大学、東京都立大学（現首都大学東京）などに勤めた野間はヨーロッパの地理学史に傾斜していった。このことは、彼らが地政学以前に行っていた研究に再帰したことを示すものである。では戦後、会のメンバーは、アジア・太平洋戦争期に行った地政学研究をどのように考えていたのだろうか。

実は少なくとも4人のメンバーが、かつて行った地政学研究に対する「自信」を表明し

ている。まず、1980年に小牧は、戦後も変わらずに抱いた「日本地政学」の「正しさ」の信念を表明している¹⁴⁸。次に、戦後室賀が地国学史、特に世界図に興味を示すのは、「世界図という表象に実は地政学がひそんでいるから」であろうと千田稔は指摘する¹⁴⁹。そして、大学を辞めてからも「実践的」ということを常に考えていた室賀の手紙¹⁵⁰を見ても、彼が地政学研究を否定的にとらえていたとは考えにくい。米倉の個人史的研究を行った岡田俊裕は、「米倉は、自らの地政学研究の核心的な内容については、その正当性に揺るぎない自信があったと思われる」と述べている¹⁵¹。さらに、村上也「日本地政学」が「誤っていた」とは考えていなかった¹⁵²。

VI. 総合地理研究会が陸軍の戦略研究の中で果たした役割

以上、総合地理研究会の活動内容を、一次資料などを用いて明らかにした。では、会は陸軍の戦略研究ひいては総力戦の中でどのような役割を果たしたのか。

第一に、IV章で言及したように、総合地理研究会は、兵要地誌図の作成、現地の地形・気象・海域状況の判断に基づく戦況の展開の想定といった作業を行っていた。参謀本部はこうした会の研究成果を「参考」にしていたようである¹⁵³。室賀報告¹⁵⁴のように、報告書の考察部分が雑誌などで公表できるものでなかったことを考慮すれば、会の研究成果は、陸軍の具体的政策と少なからず係わる内容を含んでいたものと考えられる。

第二に、会のメンバーの中に、南方において調査活動に従事した者が複数いた。浅井得一と米倉は、それぞれシンガポールにあった南方軍総司令部参謀部の第一課（作戦・情報）、第二課（兵要地誌班）に属し、西南中国、インドシナ半島の調査に従事した¹⁵⁵。また、別技はジャワ軍政監部に所属し、

「ジャワの各種学術研究機関を保護管理するとともにジャワの地理学的研究を遂行」した¹⁵⁶。浅井得一と藤野はビルマで陸軍司政官を務めている¹⁵⁷。このように彼らが南方に赴いた理由は、米倉の場合、「著書『東亜地政学序説』が軍部に評価され、利用価値のある人物と認められていた」ためである¹⁵⁸。別技の場合、彼が蘭領東インドや太平洋諸島の研究を担当していたので、「地理学者として現地を十分に調査する機会を与えると同時に、できればわれわれのもつ地誌的な知識を軍の役に立たせよう」とし、小牧が軍部へ推挙したという¹⁵⁹。浅井得一の場合、インドの研究を行っていたため、吉田中佐から依頼されたという¹⁶⁰。

第三に、国民の地理認識の啓蒙や精神昂揚のためさまざまなメディアに発表された地政学的地誌は、上述のように、総力戦の中でも思想戦という文脈の中でとらえる必要がある。「大東亜戦争で思想戦（心戦）の展開を大本営に進言したのは高嶋君であった¹⁶¹」、あるいは総合地理研究会を含む外郭団体の活動で、「高嶋さんが意図されたのは、日本精神の確固たる基盤の上に国民の思想を帰一強化し、欧米のアジア侵略の意図と戦略をつき、アジア解放の聖戦を強調し、思想戦の強化を計ることにあった¹⁶²」という関係者の証言があるように、高嶋は思想戦における地理的研究機関としての役割をこの会に期待していたと考えられる。したがって、小牧が大日本言論報国会理事として積極的に活動したこと¹⁶³や、「日本地政学」や地政学的地誌が学界やジャーナリズムの世界で注目を浴び¹⁶⁴、本もよく売れた¹⁶⁵ことを、陸軍は好意的にとらえていたと推測される。

第四に、参謀本部の外郭団体の「国防研究室」のさらに外郭団体である総合地理研究会は、当時大きな影響力をもった諸機関ともつながりをもっていた。まず、文字通り総力戦研究の中心であった総力戦研究所との関係

は、渡辺や間野が総力戦研究所の所員であったこと、同所から出版された『長期戦研究』（1945年3月刊行）の執筆陣に野間が関わっていること¹⁶⁶⁾からわかる。同研究所には、「歴史の中にその真理を探り、また歴史の中から総力戦の諸相を求めんとする姿勢」があった¹⁶⁷⁾。この姿勢は、京都帝国大学地理学教室の歴史地理学を重んずる学風と親和性があったと考えられる。また、教室と昭和通商の結びつきも無視できない。同社は世界中に支店をもっており、同社員を通じてこの会に膨大な現地情報もたらされていた可能性がある。その他、東亜研究所には御子柴が、国民精神文化研究所には中田が、興南錬成所¹⁶⁸⁾には川上健三がおり、それぞれ教室と関係をもっていた。

しかしながら、この会のメンバーは、早くから南京事件やミッドウェーの敗戦に関する情報を得ていた¹⁶⁹⁾が、日本の拡張政策および「大東亜共栄圏」の問題点を看破できなかった¹⁷⁰⁾。その理由として、メンバーの多くが、国策に対する批判的姿勢をもち合わせていないこと¹⁷¹⁾や、実際に研究地域を訪れたことがないことが挙げられる。したがって、会は参謀本部から依頼された仕事をこなす能力はあったにせよ、総力戦という枠組みの中で、限定的な役割しか果たせなかったと考えられる。会はいわば参謀本部の「下請け」研究機関であったといえよう。

Ⅶ. おわりに

以上のように筆者は、総合地理研究会に関する事実確認作業を行い、それをふまえ、会が陸軍の戦略研究の中で果たした役割について検討した。本稿で得られた新知見は、主に次の2点である。

第一に、「日本地政学」の成立過程についてである。すなわち、成立した時期を、従来いわれていた1939年ではなく、1936年末から1937年7月の間であると特定した。そして、

1938年末にはすでに陸軍と会合を行っていたことも明らかにした。さらに、本稿では、陸軍からの要請があって初めて、「日本地政学」が成立したということを知見した。本知見は、例えば小牧が神からインスピレーションを受けたためといった表現によって、「日本地政学」の成立を、特殊な背景をもった出来事として理解するものさえあった従来の研究¹⁷²⁾とは、はっきりと立場が異なるものである。陸軍からの要請以降、「日本地政学」の名のもとに展開された活動は、陸軍との密接なつながりのもと行われたものである。この事実を理解せねば、例えば小牧が国民向けに展開したプロパガンダ活動も、その意味を取り違えることになる。

第二に、総合地理研究会が陸軍の戦略研究の中で果たした役割についてである。すなわち、会の資金源や、頻度、参加メンバー、そしてその変遷といった基本的事実に加え、会が「国防研究室」の外郭団体であり、高嶋の推進していた総力戦研究、特に思想戦における地理的研究機関としての役割を担っていたことなどが明らかになった。こうした事実は、従来の研究ではいずれも明らかにされていなかったことである。そして、本稿における検討の結果、「最善の地理的資料」を、社会に「供給」しようとした地理学者¹⁷³⁾が、実は「大東亜共栄圏」の実態を見抜いておらず、総力戦という枠組みの中では、限定的な役割しか果たせなかったことも解明された。この点に、会の研究スタイルの限界や、会の思想と実践との矛盾を見出すことができよう。また、「供給」した「地理的資料」は、正確か否かは別として、参謀本部が「参考」にし、陸軍の戦略研究や思想戦遂行において、少なからず活用された。このことは、会の実践が、軍部、ひいては国民を「誤った」方向へ導いていた可能性を示唆している。

これらの新知見は、地理学史研究上、次のような意義がある。第一に、アジア・太平洋

戦争期に、地理学者と陸軍が密接なつながりを持ち、総力戦研究の一翼を担う戦略研究を行っていたことを、一次資料に基づき実証した点である。すでに公開されていた一次資料である「地政学関連史料」は、地理学者が陸軍に提出したと推測される報告書であり、地理学者と陸軍とのつながりを予想させるものではあった。しかしながら、今回筆者が、高嶋日記を用いることによって初めて、両者のつながりが実証された。

第二に、戦時期の地理学史研究においては、公刊された著作物だけではなく、日記や書簡などの個人資料や回想など、さまざまな資料に依拠する必要性を提示したことにある。従来の研究¹⁷⁴⁾では、公刊された著作物は探すが比較的容易なことや、その内容に社会的責任を負うことを前提に執筆されているという理由から、戦時期の地理学を、公刊された資料からのみ考察しようという姿勢があった。しかし、社会的な制約が多かった戦時期の地理学の深層をとらえるには、公刊された著作物に加え、公刊されていない個人資料などの一次資料をも資料に加える必要がある。もちろんこうした手法は多くの困難が伴うが、本稿のように、資料にめぐまれることもある。われわれはこうした資料の探索を決しておこたってはなるまい¹⁷⁵⁾。

世界の現状を鑑みれば、「戦争の研究をアレルギー的に拒否するのは知的怠慢¹⁷⁶⁾」というほかに、本稿で検討した総合地理研究会に加え、植民地主義や戦争にまつわる地理的知の思想や実践に、われわれはそろそろ向き合う必要があるのではなかろうか。筆者は今後、総合地理研究会に限らず、日本の植民地統治と密接な係わりをもつさまざまな調査研究機関¹⁷⁷⁾について同様の研究を行いたいと考えている。そして、こうした研究を続けることにより、筆者は、地理的知の思想や実践そのものに内在する政治性や、自らの知的営為を可能にする条件について考えていき

い。学術の社会貢献が必要以上に叫ばれる傾向にある現在を生きるわれわれにとって、アジア・太平洋戦争期の地理学者の営為は、示唆的であると考えからである。

(日本学術振興会特別研究員, 京都大学・院)

〔付記〕

小牧家所蔵の資料閲覧に御協力いただいた小牧氏の三男平野健男・徑子御夫妻、滋賀県立琵琶湖博物館所蔵の「小牧家資料」閲覧の機会を与えてくださった同博物館の太田佳恵さん、中藤容子さん、橋本道範さん、総合地理研究会の写真の掲載許可をいただいた浅井辰郎先生(故人)のほか、明石陽至、阿部正道、石田寛、内田秀雄(故人)、大島襄二、大城直樹、岡田俊裕、河野通博、島津俊之、千田稔、手塚章、戸祭由美夫、内藤玄匡(故人)、中田栄一、西村睦男(故人)、久武哲也(故人)、松田清、宮畑巳年生各先生に深甚なる謝意を表す。本稿作成の間に、お世話になった先生方のうち、5名の方が相次いでお亡くなりになった。生前に賜った懇切なる御指導に感謝するとともに、謹んで御冥福をお祈り申し上げる。

本稿は、2006年1月に京都大学大学院文学研究科に提出した修士論文の後半部分を修正したものであり、その骨子は同年6月の第49回歴史地理学会大会で発表した。また、平成19年度科学研究費補助金特別研究員奨励費(課題番号: 19・7978)を使用した成果である。

〔注〕

- 1) ①花澤秀文『高山岩男—京都学派哲学の基礎的研究—』, 人文書院, 1999, 130~167頁。②大橋良介『京都学派と日本海軍—新史料『大島メモ』をめぐって—』(PHP新書185), PHP研究所, 2001。
- 2) ①前掲1) ①130~167頁。②前掲1) ②。
③有馬学「誰に向かって語るのか—(大東亜戦争)と新秩序の言説—」(酒井哲哉編『「帝国」編成の系譜』(岩波講座「帝国」日本の学知1), 岩波書店, 2006), 251~285頁。
- 3) 若井敏明『平泉澄—み国のために我づくさ

- なむ-」(ミネルヴァ日本評伝選), ミネルヴァ書房, 2006。
- 4) ①中生勝美「地域研究と植民地人類学」, 地域研究論集2-1, 1999, 19~36頁。②坂野徹『帝国日本と人類学者 1884~1952年』, 勁草書房, 2005, 403~468頁。
- 5) 例えば, 柴田陽一「小牧実繁の『日本地政学』とその思想的確立-個人史的側面に注目して-」, 人文地理58, 2006, 1~19頁。
- 6) ①福嶋依子「地理学の方法論的反省と地政学」, お茶の水地理32, 1991, 2~3頁。②Takeuchi, K., *Modern Japanese Geography: An Intellectual History*, Kokon Shoin, 2000, pp.131-133。③岡田俊裕『地理学史-人物と論争-』, 古今書院, 2002, 101~105頁。
- 7) 源昌久「わが国の兵要地誌に関する一研究-書誌学的研究-」, 空間・社会・地理思想5, 2000, 37~61頁。
- 8) ①金窪敏和「終戦前後における参謀本部と地理学者との交流, および陸地測量部から地理調査所への改組について-渡辺正資料をもとに-」, 外邦図研究ニューズレター2, 2004, 41~42頁。②久武哲也『兵要地理調査研究会について』(渡辺正氏所蔵資料編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部-渡辺正氏所蔵資料集-』, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, 2005), 5~19頁。
- 9) 正井泰夫・竹内啓一編『続・地理学を学ぶ』, 古今書院, 1999。
- 10) 近年, アメリカでは, 次のような成果が発表された。Barnes, T. J., "Geographical intelligence: American geographers and research and analysis in the Office of Strategic Services 1941-1945," *Journal of Historical Geography*, 32, 2006, pp.149-168。
- 11) 前掲5) 1頁。
- 12) ①浅井辰郎「私は建大になぜ勤めたか」(建国大学同窓会編『歓喜嶺遥か(上)』, 「歓喜嶺遥か」編集委員会, 1991), 28~32頁。②村上次男『回想は続く』(私家版), 1993。③別技篤彦「歩み来し跡-自撰年譜抄-」(ラフレシアの会編『愛-別技篤彦追悼集-』ラフレシアの会, 1999), 8~26頁。④浅井得一「日本地理教育学会私記」, 新地理47-3・4, 2000, 3~6頁。
- 13) 「通称『吉田の会』による地政学関連史料」, 空間・社会・地理思想6, 2001, 59~112頁。同資料は, 別技篤彦の死後, 古書店に流出したことや, 資料中にある「別技」という署名から, 別技が所蔵していたものと推測される。
- 14) ①山野正彦「探検と地政学-大戦期における今西錦司と小牧実繁の志向-」, 人文研究51, 1999, 1123~1124頁。②Takeuchi, K., "Japanese Geopolitics in the 1930s and 1940s," in Dodds, K. and Atkinson, D. ed., *Geopolitical Traditions: A Century of Geopolitical Thought*, Routledge, 2000, p. 82。③前掲6) ②p.130。④Takeuchi, K., "Reappraisal of the indigenous tradition of geography by academic geographers in modern Japan," 地誌研年報10, 2001, p.15。⑤クリスティアン・W・シュパング著, 中田潤訳「日独関係におけるカール・ハウスホーファーの学説と人脈 1909~1945」, 現代史研究46, 2000, 43頁。⑥クリスティアン・W・シュパング著, 石井素介訳「カール・ハウスホーファーと日本の地政学-第一次世界大戦後の日独関係の中でハウスホーファーのもつ意義について-」, 空間・社会・地理思想6, 2001, 8頁。⑦前掲8) ②5~19頁。⑧前掲6) ③97~101頁。
- 15) ①前掲14) ②p.82。②前掲6) ②p.130。③前掲14) ④p.29。
- 16) 前掲8) ②13~19頁。
- 17) 前掲14) ①。
- 18) 防衛研究所図書館所蔵の「高嶋辰彦陸軍少将日記」(昭和13~16年)。同資料については, 防衛研究所のウェブサイト (<http://www.nids.go.jp>) の「第52回史料公開ニュース」(2004年8月)を参照されたい。
- 19) 注13) 参照。
- 20) ①前掲12) ①。②浅井辰郎「別技篤彦名誉会員のご逝去を悼む」, 地理学評論70, 1997, 553~554頁。③浅井得一「一地理学徒の経験」, 新地理2-4, 1948, 30~35頁。④同「バーモ暗殺未遂事件についての証言

- (上)], 政治経済史学144, 1978, 1~14頁。⑤同「バーモ暗殺未遂事件についての証言(下)」, 政治経済史学145, 1978, 1~18頁。⑥同「バーモ暗殺未遂事件についての証言(補遺)」, 政治経済史学149, 1978, 11~22頁。⑦同「地理学徒の覚え書き」, 国士舘大学地理学会誌2, 1980, 1~7頁。⑧同「ビルマにおける花谷正中将の行動—大東亜戦争公刊戦史の限界について—」, 政治経済史学207, 1983, 1~11頁。⑨同「ビルマに関する公刊戦史の限界についての考察—インパールからモルムンまで—」, 政治経済史学251, 1987, 1~26頁。⑩前掲12) ④。⑪小牧実繁「戦前, 戦中, 戦後」, 湖国と文化12, 1980, 16~17頁。⑫村上次男『八十歳の回想』(私家版), 1991。⑬前掲12) ②。⑭別技篤彦「東南アジア研究30年の小史(渡辺光教授退官記念会編『現代の地理学—その課題と展望—』, 古今書院, 1970), 347~360頁。⑮前掲12) ③。
- 21) 『続・地理学を学ぶ』には, 浅井辰郎(1998年8月25日), 村上次男(1999年5月8日), 米倉二郎(1997年11月18日)のインタビューが収められている。①前掲9)。同書からの引用は, 頁数の後に「(浅井)」のように発言者の名前を示す。また, 村上は1998年11月26日にもインタビューに応じている。②村上次男「日本地政学の末路」, 空間・社会・地理思想6, 1999, 55頁。テープに録音されたインタビューの内容は, まだ公にされていないが, 総合地理研究会の研究を進める上で貴重な証言が数多く含まれているので, 必要に応じて使うことにする。引用に際しては, 「村上次男「インタビュー」, 1998。」と記すことにする。なお, この資料はテープ起こしされプリントされているので, ページ数も記すことにする。この資料は久武哲也氏(故人)より入手した。
- 22) 大島襄二(2004年3月20日, 人文地理学会アジア地域研究部会, 於京大会館), 河野通博(2005年3月15日, 於サンシティ高槻), 中田栄一(2005年6月4日, 於中田氏の自宅)。これらのインタビューによる情報を引用する場合は, 文末に「(河野へのインタビュー)」のように示すことにする。
- 23) 前掲5) 19頁。
- 24) ①前掲14) ①1121~1123頁。②前掲14) ②80~81頁。③前掲14) ④15頁。
- 25) 前掲5) 4~8頁。
- 26) ①前掲14) ①1123頁。②水内俊雄「解題(通称『吉田の会』による地政学関連史料)」, 空間・社会・地理思想6, 2001, 60頁。③前掲6) ③97頁。④前掲8) ②14頁。
- 27) ①小牧実繁「皇国日本の地政学」(文部省教学局編『日本諸学講演集第十七輯地理学篇』, 印刷局, 1944), 35頁。次の文献にも同様のことが述べられている。②小牧実繁「カール・ハウスホーファー論」, 国民評論15-4, 1943, 7~8頁。
- 28) ①藤澤親雄「ルドルフ, チェレーンの国家に関する学説」, 国際法外交雑誌24, 1925, 155~175頁。②飯本信之「人種争闘の事実と地政学的考察」, 地理学評論1, 1925, 852~873, 955~967頁, 2, 1926, 47~60頁。
- 29) 1936年3月に卒業した村上次男によれば, 彼が「学生の頃」, すなわち1934~35年ごろ別技篤彦, 松井武敏, 米倉二郎が地政学の本を読んでいたようである。①村上次男「インタビュー」, 1998, 6~7頁。また, 村上は, 「日本地政学」の研究を始めたのは, 「昭和一二, 三年の頃のことです。野間君から聞いた話では, 室賀信夫さんが力になって。その前には米倉先生やら松井武敏, 別技篤彦, 川上健三。こういう人が小牧実繁さんに影響を与えていると思います」と述べている。②前掲9) 59頁(村上)。
- 30) ①前掲9) 59頁(村上)。室賀による日本の地理思想研究は, 次の文献にその成果を見出せる。②室賀信夫「林子平と古川辰」, 史林26, 1941, 142頁。③室賀信夫「神話と国土」, 地理論叢13, 1943, 16~28頁。これらの文献から, 彼の地理思想研究が, 現代地理学のとるべき道を過去の事例を参考にして考えようという意図のもと行われていたことがわかる。
- 31) 前掲9) 59頁(村上)。松井は, 1939年に地

- 理学談話会で「地理学の実践性」(11月4日)という発表を行っている。地理学談話会の発表や地理学教室の講義題目については、『史林』各号末の彙報を参照した。
- 32) 別技篤彦「ラテン・アメリカに於ける石油資源の地政学的意義」, 地理論叢8, 1936, 497~534頁。この文章は、末尾の「(昭一〇・一二・七稿了)」という記述から、1935年末に書き終えられたものであることがわかる。
- 33) 米倉によれば、日中戦争が始まった1937年末、「支那軍事地理概観」を書き、「事変の長期化すべきを憂へ、ある雑誌に寄稿した」が、当時は政府見解と異なるため公開されなかった。ただ、1938年に入ると小牧により、「より適当なる方面に呈出され、安慶作戦、武漢作戦に当つては卑見を開陳するの機会を得た」という。①米倉二郎『東亜地政学序説』, 生活社, 1941, 1頁。この「支那軍事地理概観」は、『東亜地政学序説』の4章に収録されている。また、「より適当なる方面」とは、米倉に聞き取り(1996年2月3日)を行った岡田によれば、軍部だという。②岡田俊裕「十五年戦争期の米倉二郎」, 地理科学53, 1998, 81, 91頁。村上も同様のことを述べている。③前掲12) ②68頁。
- 34) 1941年12月に、小牧は、「地政学をとりあげるの支那事変の始まる前、少くとも三四年前であつた」と述べている。①小牧実繁・野間三郎「研究室の扉を敲く(8) 地理学教室」 京都帝国大学新聞12月20日, 1941, 1面。また、小牧は戦後、次のように回想している。「京都帝国大学文学部の教授として必要な学位論文の作成に努め、昭和十一年末、その作成提出を終ると、東洋伝統の思想『地は政の本なり』の根本原理に従い、『日本地政学』の研究に留意することとな」った。②前掲20) ⑩16~17頁。
- 35) 小川琢治『戦争地理学研究』, 古今書院, 1939。この本は、小川が1910年代から雑誌に発表してきた論文をまとめたものである。
- 36) ①小牧実繁『日本地政学宣言』, 弘文堂書房, 1940, 205~206頁。②前掲12) ②70~71頁。
- 37) 前掲12) ②66~67頁。京都大学附属図書館に収められた室賀信夫の蔵書である「室賀コレクション」には、ラッツェルの*Politische Geographie*の初版から第三版までがともに見受けられる。
- 38) 1938年11月1日の高嶋日記には、「青山, 京大の小牧実繁博士来訪。昼食後迄語る。真面目にて静かなる人物 政治地理学につき依頼す」と記されている。また、日記から、1938年6月10日、高嶋がすでに京大地理学教室を訪れていることもわかる。ただ、このとき小牧は国際地理学会議(IGC)出席のため渡欧中であった。したがって、高嶋日記を見る限り、高嶋と小牧の接触は、11月ということになる。
- 39) 1938年当時、第十課だった参謀本部第四部戦史課は、戦史に基づく戦争指導および作戦に関する資料の収集調査、内外の諸戦史に関する研究、戦史の編纂補修を担当していた。戦史課は、1940年8月第十二課となり、1943年10月15日廃止された。秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』(第2版), 東京大学出版会, 2005。以下、陸海軍の基本的な情報の確認は、この辞典に多くを拠っているので、それ以外の文献を用いた場合を除き、文献の表記を省略する。
- 40) 1938年当時、第十一課だった参謀本部第四部戦法(戦略戦術)課は、国防戦略戦術に関する調査研究を担当していた。戦法課は、1936年6月発足、1940年8月に第十三課となり、1943年10月15日廃止された。
- 41) 1938年7月に参謀本部第四部に移った高嶋は、同年9月1日付けで、第十課・第十一課の課長代理の発令を受けた。
- 42) 小牧実繁「地理学に志す人へ」, 京都帝国大学新聞11月5日, 1938, 5面。小牧がこの文章を執筆した11月3日は、高嶋が初めて接触した日から2日後のことである。
- 43) ①前掲12) ②74頁。②前掲29) ①8頁。
- 44) 12月23日の高嶋日記には、「九時青山, 田中大尉来訪す。十時小牧博士, 川上健三氏来訪一同にて国防地理の打合せをなす。午後

- 間野少佐をも合し二時半まで打合せ」と記されている。
- 45) 1938年末の高嶋日記に、「京大文科の地理学者小牧実繁博士を中心としその学風の門下出身者を以て総合地理研究会を組織し第二の外廓となす」と記されている。第一の外廓とは、後述する「戦争文化研究所」のことである。
- 46) 森松俊夫編『総力戦研究所』, 白帝社, 1983, 31頁。
- 47) 高嶋は、1929年1月から軍事研究のため、3年間ドイツに駐在し、ベルリン大学やキール大学などで学んだ。彼の駐在時期は、ちょうどエーリヒ・ルーデンドルフ(Ludendorf, Erich)の総力戦論が発表された時期に当たり、彼は総力戦に強い関心をもつようになった。①森晴治編『雪松・高嶋辰彦さんの思い出』(私家版), 1981, 387~391頁。ルーデンドルフが1935年に著した*Der totale Krieg*は、後に間野が訳出している。②エーリヒ・ルーデンドルフ著、間野俊夫訳『国家総力戦』, 三笠書房, 1938年。その解説として、次の文献がある。③間野俊夫『ルーデンドルフの国家総力戦』(戦争文化叢書17), 世界創造社, 1939。
- 48) 当時参謀本部嘱託として「国防研究室」で研究に従事していた藤田は「研究室は当時の中心課題であった国家総力戦について少壮の軍人や学者を研究員として研究していた」と回顧している。①藤田清「皇戦会と高嶋さん」(森晴治編『雪松・高嶋辰彦さんの思い出』(私家版), 1981), 37頁。同じく当時「国防研究室」にいた石村や間野も同様のことを述べている。②石村善左「高嶋閣下のお人柄にふれて」(森晴治編『雪松・高嶋辰彦さんの思い出』(私家版), 1981), 60~65頁。③間野俊夫「高嶋さんと総力戦」(森晴治編『雪松・高嶋辰彦さんの思い出』(私家版), 1981), 70~75頁。
- 49) 1938年末の高嶋日記には、「七月 国防研究室を外廓として組織す しかし寄せ集めの学者にて業務の統一思うに任せず 人事の失敗を反省」と記されている。また、「国防研究室」には、「作田〔莊一〕, 羽田〔亨〕, 天野, 石川, 原, 高山〔岩男〕, 牧, 谷口」を参加させていたという。
- 50) ①前掲48) ③72~73頁。「国防研究室」は当初、文部省の国民精神文化研究所内に間借りしていた。「国防研究室」はその後、青山に移転した。②前掲48) ②60頁。③前掲48) ①37頁。
- 51) 高嶋日記に、「十月下旬 仲小路, 小島等を中心とするメンバーを以て戦争文化研究所を外廓とすることとなる」とあるように、高嶋は、総合地理研究会のほか、仲小路彰を中心として設立された「戦争文化研究所」を「国防研究室」の外郭団体としている。
- 52) ①前掲20) ②553頁。②前掲29) ①10頁。
- 53) 12月8日の高嶋の日記に、「地理学者川上健三氏を国防研に採用の件決裁あり」と記されている。
- 54) 川上の著書における問題意識は、「日本地政学」のそれと同様であり、彼が総合地理研究会のメンバーと同じ思想をもっていたことがうかがえる。川上健三『ナチスの地理建設』(ナチス叢書), アルス, 1941。なお、彼が1942年度に京大で「総力戦と地理学」の講義を担当していることも注目される。
- 55) ①前掲20) ⑤4頁。②前掲12) ②73頁。③前掲29) ①8~14頁。④前掲9) 60頁(村上)。
- 56) 総合地理研究会が昭和通商から研究を委嘱されていたことは、次の2つの資料からわかる。まず、「昭和通商株式会社調査部パンフレット第一号」(全10頁)である。その内容は、小牧が1942年、昭和通商調査部研究会において講述した「アジアの地政学—特に民族と文化とに重点を置いて—」である。パンフレットには、調査部研究会の開催日時や刊行年は記されていないが、内容が1942年1月15日に小牧が執筆した同名の論文と全く同じであることから、1942年に公刊されたものと見てよいだろう。①小牧実繁「アジアの地政学—特に民俗と文化に重点を置いて—」, 理想日本1-2, 1942, 34~42頁。次に、室賀執筆の草稿「南方圏統治への地政学的試案」の冒頭欄外に、「本篇

は昭南通商調査部の委嘱により昭和十六年十月八日、小牧教授まで提出するものなり」と記されていることである。②京都大学附属図書館編『日本の西方・日本の北方—古地図が示す世界認識—(京都大学附属図書館所蔵室賀コレクション古地図展)』, 京都大学附属図書館, 1998, 7頁。ここから、遅くとも1941年秋からは、総合地理研究会が昭南通商から研究の委嘱を受けていたことが確認できる。

- 57) 当時、昭南通商に就職した地理学教室の卒業者は、池田光二、川喜田二郎、河地貫一、木村憲治、戸川俊正、伴豊の6名である。木村を除く5名は、次の名簿から確認される。①地理学談話会『昭和十九年六月地理学談話会名簿』地理学談話会, 1944, 10~11頁。木村の場合は、岡田の著書により確認される。②岡田俊裕『地理学者の戦時著作目録』和田書房, 2006, 123頁。また、河地貫一、堀川侃の卒業論文(1941年12月提出)は、1943年に『地理論叢』第13輯に掲載される以前に、昭南通商の調査部から「調第20号」「調第22号」として刊行されている。③河地貫一「濠洲の地政学的考察—白濠主義を中心として—」, 地理論叢13, 1943, 224~273頁。④堀川侃「印度支那交通の新構成」, 地理論叢13, 1943, 84~153頁。⑤昭南通商株式会社調査部『濠洲の地政学的考察—白濠主義を中心として—』(調第20号), 昭南通商, 1942。⑥昭南通商株式会社調査部『日本地政学ノ立場ヨリスル印度支那ニ於ケル交通組織ノ新構成』(調第22号), 昭南通商, 1942。さらに、1942年に『地理論叢』第12輯に掲載された西田和夫の論文も、それ以前に昭南通商から刊行されている。この論文は、1941年5月16日の地理学談話会における発表「印度支那半島の米穀資源」がもとになっている。⑦西田和夫「印度支那米作の地政学的考察」, 地理論叢12, 1942, 80~95頁。⑧昭南通商株式会社調査部『印度支那の米穀資源』(調第15号), 昭南通商, 1941。いずれも両者の内容は全く同一である。しかし、西田と堀川が昭南通商に就職したかどうかは、文献か

ら確認することはできない。一方、川喜田は、佐野が行ったインタビューに対し、「今西〔錦司〕さんからこのままでは軍隊に引っぱられるから、昭南通商に入らんかといわれた。昭南通商にいたのは四ヶ月ぐらいだった」と答えている。⑨佐野真一『旅する巨人—宮本常一と渋沢敬三—』, 文藝春秋社, 1996, 179頁。

- 58) 1941年度に総合地理研究会に参加した中田栄一によれば、同会は昭南通商から資金を受け取っており、それは鈴木福一(1899~1960年)という同社員を通じてであったという(中田へのインタビュー)。次の文献の訳者紹介や地理学談話会名簿によれば、鈴木は、1934年に広島文理科大学史学科を卒業し、京都帝国大学大学院を経て、立命館大学専門部教授を務め、その後昭南通商に入社した人物である。同社では調査部第二課に所属していた。①ジョージ・キンブル著、鈴木福一訳『世界の未開拓地』, 葛城書店, 1941。②地理学談話会『昭和十三年六月会員名簿』地理学談話会, 1938, 10頁。③前掲57) ①15頁。また、鈴木は、小牧監修の『新世界叢書』の1冊を分担している。④鈴木福一『アメリカ本土』(新世界叢書), 目黒書店, 1944。
- 59) ①前掲46) 34~36頁。また、高嶋は、総力戦思想に立つ国防学研究の必要性を著書の中で述べている。②高嶋辰彦『皇戦—皇道総力戦世界維新理念—』, 戦争文化研究所, 1938。
- 60) 前掲46) 34~36頁。文中に記した人に加え、高嶋は次の人々に皇戦会の顧問の承諾を得ている。羽田亨京都帝国大学総長、有馬良橋大将、柴五郎大将、奈良武次大将、林銑十郎大将、本庄繁大将、筑紫熊七中將、中島鉄蔵参謀次長、古賀峯一軍令部長、郷誠之助、伍島貞雄、永井柳太郎ら。また、皇戦会の評議員は笠原幸雄参謀本部総務部長、富永恭次郎参謀本部第四部長、飯村穰陸軍大学校長ら、理事長は中岡弥高中將、理事は「国防研究室」のメンバーが当たっている。
- 61) 1939年4月1日の高嶋日記には、「九時半軍

- 人会館、各界の世話人を集め『今日の総力戦略』の講話稍々正午前に及ぶ。次で小牧博士の説明、昼会食後懇談に移り、資金の問題にまで言及す、二時過解散次で発起人会を行う」とある。なお、総合地理研究会とは別に、高嶋は皇戦会の研究会を開いていた。高嶋日記によれば、1939年4月1日に発起人会に続き、同月19日に青山で第一回の研究会が開かれている。5月18日にも研究会が開かれ、「世界歴史図表等の研究」をしたとある。
- 62) 軍事史学会編『大本営陸軍部戦争指導班機密戦争日誌（防衛研究所図書館所蔵）下巻』、錦正社、1998、761、771頁。
- 63) ①前掲46) 34～36頁。1939年12月には、皇戦会事務局が青山の青年会館から、「国防研究室」の建物に移り、両者はますます近い関係になった。なお、皇戦会の出版物として、例えば次のものがある。②皇戦会編『日本世界総力戦－皇戦展覧会概要－』、世界創造社、1939。
- 64) 前掲48) ③73頁。
- 65) 前掲20) ⑤2～4頁。
- 66) ①前掲57) ⑨166～169頁。②防衛庁防衛研修所戦史室『陸軍軍需動員(2)実施編』（戦史叢書）、朝雲新聞社、1970、316～319頁。③山本常雄『阿片と大砲－陸軍昭和通商の七年－』、PMC出版、1985。昭和通商の支店は、最盛時には、ニューヨーク、ベルリン、ローマ、バンコク、マニラ、シンガポール、北京、南京、広東、新京などに置かれていた。昭和通商に関しては次の文献もある。④柴田善雅「陸軍軍命商社の活動－昭和通商株式会社覚書－」、中国研究月報 58-5、2004、1～19頁。
- 67) 前掲29) ①15頁。
- 68) 前掲29) ①9頁。
- 69) ①前掲20) ⑤5頁。②前掲12) ②73頁。中田によれば、総合地理研究会が開かれていた民家は現存しているという（中田へのインタビュー）。村上も同様のことを述べている。③前掲9) 63頁（村上）。
- 70) ①前掲20) ⑤5頁。②前掲12) ②73頁。③前掲29) ①13頁。
- 71) 前掲29) ①14頁。
- 72) 前掲29) ①13～14頁。
- 73) ①前掲12) ②73～74頁。②前掲29) ①10、23頁。③前掲9) 61頁（村上）。
- 74) 山口貞雄『日本を中心とする軌近地理学発達史』、済美堂、1943、237頁。
- 75) 二人が研究会に参加した時期は、別技が遅くともジャワへ発つ1942年3月までなのに対し、村上は同年4月以降というように異なっている。
- 76) 前掲20) ⑤5頁。
- 77) 村上によれば、吉田の民家に来るのは皇戦会の人に限られ、高嶋と同じく参謀本部の人であっても、皇戦会以外の人は陳列館の2階にあった地理学研究室に来たという。前掲29) ①14頁。
- 78) Stephan, J. J., *Hawaii Under the Rising Sun: Japan's Plans for Conquest after Pearl Harbor*, University of Hawaii Press, 1984, p.149. この情報は、1979年8月18日、ステファンが村上から聞いたものである。
- 79) ①前掲29) ①10頁。四王天は、『猶太思想及運動』などの著書で知られた反ユダヤのプロパガンディストであった。②四王天延孝『猶太思想及運動』、内外書房、1941。③同『四王天延孝回顧録』、みすず書房、1964。
- 80) メンバー特定の根拠は、小牧、米倉、別技、川上健三、室賀、松井、朝永、御子柴、浅井得一、野間、浅井辰郎、柴田、川上喜代四、三上については浅井辰郎の記述に、村上、和田、岡本については村上の回想に基づいている。①前掲20) ②553頁。②前掲12) ②66～79頁。なお、浅井辰郎はメンバーを14名と指摘するが、それは、彼が会と係わった時期、すなわち1939年度のメンバーでしかない。
- 81) 小葉田は、村上によれば、会のメンバーではないとされるが、小牧監修の『新世界叢書』を分担するなど会の活動と係わりをもっていたことが推測される。①前掲29) ①16頁。②小葉田亮『ベーリング海』（新世界叢書）、目黒書店、1943。中田は、1941年度、会に「オブザーバー」として参加したという。「オブザーバー」は、会に参加する

のみで、意見を述べることは許されなかったという（中田へのインタビュー）。藤野は、浅井得一の回想に「藤野君の担当はタイであった」と記されていることや、実際、タイに関する著作を発表していることから、会の活動との係わりが推測される。ただし、メンバーであったという証言はない。③前掲20) ⑦5頁。④藤野義明「泰国護謨資源の地政学的意義」, 地理論叢12, 1942, 111~129頁。また、西田、河地、大島、船越は、大学院生や副手として教室に在籍した時期や、卒論などで地政学的著作を著していることから、会の活動との係わりが推測される。⑤前掲57) ⑦。⑥前掲57) ③。⑦大島襄二「鈴木福一著：アメリカ本土」(書評), 史林29, 1944, 198~199頁。⑧船越謙策「ベルシャ湾-英国支配の成立と其の展望-」, 史林29, 1944, 282~301頁。ただし、村上によれば、河地は会に「直接出てなかったと思う」と述べているし、大島は民家の本を利用しに来てはいたが、会のメンバーではないという。⑨前掲29) ①10~13頁。

82) 表2は、これらのメンバーおよび関係する人物の略歴を卒業年順に示したものである。

83) 前掲29) ①10頁。

84) 福川秀樹編『日本陸海軍人名辞典』, 芙蓉書房出版, 1999, 279頁。

85) ①前掲48) ③74頁。②前掲48) ②65頁

86) ①前掲48) ②65頁。総力戦研究所については次の文献を参照。①芦沢紀之「実録・総力戦研究所-太平洋戦争開始前夜-」, 歴史と人物10月号, 1972, 73~95頁。②太田弘毅「総力戦研究所の設立について」, 日本歴史355, 1977, 40~60頁。③同「総力戦研究所の教育訓練」, 政治経済史学142, 1978, 17~28頁。④同「総力戦研究所の業績-『占領地統治及戦後建設史』, 『長期戦研究』について-」, 軍事史学14-4, 1979, 36~53頁。

87) 渡辺は、1943年5月に企画院第一部長、11月に軍需省総動員局監理局長を経て、1944年11月、独立混成第2旅団長（北支那方面

軍、駐蒙軍）として張家口へ向かっている。渡辺の履歴については次の文献を参照した。①前掲84) 542頁。②高橋久志「(史料紹介) 元マレー方面軍政部長元陸軍少将渡辺渡『大東亜戦争における南方軍政の回顧-亡き山下將軍を偲ぶ-』」, 軍事史学111, 1992, 49~82頁。③明石陽至編・解説『渡邊渡少将軍政(マラヤ・シンガポール)関係史・資料』, 龍溪書舎, 1998。

88) 藤田清(1907~不明)は、1930年京都帝国大学文学部卒業後、滋賀県の中学校、師範学校教諭を経て、教育総監部や陸軍大学校に勤めた人物である。①藤田清『仏教カウンセリング』, 誠信書房, 1964。また、戦争中の藤田の著作として次の文献がある。②藤田清「総力戦の把握」, 科学主義工業8-6, 1944, 4~9頁。

89) 1941年10月、『東亜地政学序説』を上梓した米倉は、原稿を小牧のほか高嶋辰彦、間野俊夫、川上健三、藤田清に添削してもらったという。前掲33) ①1頁。

90) 前掲20) ⑤8頁。

91) 前掲59) ②181頁。

92) 前掲20) ②553頁。

93) 前掲20) ④347頁。

94) 浅井辰郎・朝永陽二郎・柴田孝夫・松井武敏・別荘篤彦・野間三郎・室賀信夫・米倉二郎「皇戦地誌に関する意見」, 空間・社会・地理思想6, 2001, 74~83頁。これは「地政学関連史料」の一部で、1940年2月に執筆されたものである。

95) 小牧は、「著書、雑誌、新聞等公開の機関に現はれたる所謂地政学論なるものは、実は当初より専ら国民の教育を主眼とする、国民精神昂揚のためにする教育的意義を有するものに外ならなかつた」と述べている。①小牧実繁「日本地政学の将来-行くべき道と行かざるを得ない道と、理想と現実と-」, 政界往来13-10, 1942, 27頁。浅井も、「総合地理研究会は…研究作品を通しての皇戦理念の国民的覚醒をも責務とする」と述べている。②前掲94) 75頁。村上も、「地政学の公刊された著書というのは、いわば一種のデモンストレーションか、思想戦

- の宣伝ビラのような意味しかもっていない」と述べている。③前掲12) ②72頁。
- 96) 『世界地理政治大系』(白揚社)には、総力戦研究所長の飯村穰中尉と、京都帝国大学総長羽田亨による推薦の辞がある。上述のように、飯村は、高嶋の後任として皇戦会常務理事を務めた渡辺の同僚であり、羽田は、皇戦会の顧問であることに注意されたい。
- 97) 『新世界叢書』(目黒書店)として、次の3冊が刊行されている。①浅井得一『ラングーン・カルカット』, 目黒書店, 1943。②前掲81) ②。③前掲58) ④。
- 98) 『朝日時局新輯』(朝日新聞社)として、次の4冊が刊行されている。①小葉田亮『アラスカ』, 朝日新聞社, 1942。②室賀信夫『昭南島』, 朝日新聞社, 1942。③和田俊二『オーストラリア』, 朝日新聞社, 1942。④同『ニュージーランド』, 朝日新聞社, 1942。
- 99) 小牧編著の『大東亜地政学新論』には、14本の論文が収められているが、すべて研究会のメンバーが執筆したものではない。確実にメンバーだった者による論文は7本にとどまる。同書は、『地理論叢』第13輯と同じ内容である。小牧実繁編『大東亜地政学新論』, 星野書店, 1943。
- 100) ①小牧実繁『世界新秩序建設と地政学』(日本思想戦大系), 旺文社, 1944。村上によれば、同書は小牧の単著という形式をとっているが、実際はメンバーで分担して書いたものであるという。室賀は北アメリカ、野間はヨーロッパ、川上喜代四は北極と南極、村上は中南米、太平洋、インド洋、インドを担当したという。②前掲29) ①9～10頁。
- 101) ①小牧実繁「地理学維新—『新世界地誌』の序にかへて—」, 新若人1月号, 1942, 94～99頁。②室賀信夫「泰、ビルマの白禍」, 新若人1月号, 1942, 66～72頁。③別技篤彦「去就に悩むラテンアメリカ—新世界地誌(3)—」, 新若人3月号, 1942, 130～136頁。④小葉田亮「精神と統一を欠く北アメリカ—新世界地誌(5)—」, 新若人5月号, 1942, 36～42頁。⑤浅井得一「印度へのアジアへの復権—新世界地誌—」, 新若人6月号, 1942(未見) ⑥朝永陽二郎「アフリカは果たして暗黒か」新若人8月号, 1942(未見) ⑦三上正利「シベリアとアラスカ—新世界地誌(9)—」, 新若人9月号, 1942, 75～80頁。⑧野間三郎「ヨーロッパの地理的特性」, 新若人10月号, 1942(未見) ⑨松井武敏「風雲を孕む西南アジア」, 新若人11月号, 1942(未見)
- 102) 村上によれば、小牧の名前で発表されている地政学的地誌は、小牧自身は端書きとといったところだけ書き、残りはほかのメンバーが執筆したという。前掲29) ①9頁。
- 103) ①前掲20) ⑤4頁。②前掲12) ②73頁。③前掲20) ②553頁。「私が自発的に選んで対象としたのがマライ群島の部分だった」という別技のように、自ら担当地域を希望した例もあった。④前掲20) ④347頁。しかし、「どこでもという人には小牧先生が〔担当地域を〕割り当て」た米倉はいう。⑤前掲9) 17頁(米倉)。
- 104) 柴田がもともと日本を研究対象としていたことは、次の文献からうかがえる。柴田孝夫「我が国土の地理的省察」, 地理論叢11, 1940, 77～98頁。その後、彼は南米の地政学的地誌研究に移ったと思われるが、筆者は現時点でその成果を発見できていない。
- 105) 前掲12) ②73頁。
- 106) 前掲12) ②73頁。
- 107) 前掲29) ①6頁。
- 108) 前掲20) ⑦5頁。
- 109) ①岡本信太郎「支那の癌」, 興亜教育3-2, 1944, 26～35頁。②同「ピロピジャン猶太人植民地—特にその設立の意義に就いて—」, 史林30, 1945, 35～49頁。また、岡本は地理学談話会で、「ユダヤ民族の—地理学的研究」(1941年2月1日)や、「支那事変を繞る猶太問題」(1941年7月1日)、「シオニズムと英国」(1943年7月10日)と題して発表している。
- 110) 地理学談話会で、野間は「フィリッピンの民族」(1943年10月9日)、三上は「ビルマ農村の復興とその米産」(1944年3月18

- 日), 岡本は「印度の独立問題」(1943年12月11日)と題して発表している。室賀については注100)を参照されたい。この時期の研究成果が、戦後『アメリカ国土論』として発表されたと推測される。室賀信夫『アメリカ国土論』, 三明社, 1949。
- 111)前掲94) 74~83頁。
- 112)前掲94) 80頁。また、朝永は、重要度の高い地域を順に並べると、「支那大陸(満洲大陸・蒙古を含む)・日本」, 「南亜細亜・シベリア」, 「近東地方・中南米・アフリカ」, 「オーストラリア・北米・南米・欧羅巴」となると述べている(同76頁)。
- 113)雑誌に公表されたものとして、次の2編が判明している。①小牧実繁「ヨーロッパとは何ぞや—日本地政学の見地より—」, 国民評論15-8, 1943, 16~21頁。②同「アメリカ—その地政学的運命—」, 古事記研究7-9, 1943, 14~19頁。
- 114)①河野通博「私の歩いて来た道」, 史泉72, 1990, 5頁。②同「地理教室の追憶」, 京都大学地理学談話会会報8, 1997, 5頁。
- 115)小牧の指示により、1940年度(1941年3月)卒業生は、9月に急遽テーマ変更を余儀なくされた。果樹栽培の研究を志していた岡本は、ユダヤ問題にテーマを変更した。岡本の卒業論文は「猶太民族の一地理学的考察」であった。岡本は戦後、最初に志した果樹栽培の研究を行うことになる。その他、藤野はタイの交通、西田は朝鮮の米作に関する卒業論文を書いている。しかしながら、中田は、小牧の指示に対し、自分の研究は小牧の意図に沿っていると考え、「日本沿岸に於ける社会の地縁」という卒業論文を提出したが、小牧の評価はよくなかったという。それは中田によれば、外国の問題を扱っていなかったところに主に起因するという。なお、同年卒業した林宏のテーマも国内を扱ったものであるが、彼の場合、繰り越し卒業だったため、小牧の指示の対象外であったという(中田へのインタビュー)。
- 116)中田によれば、「日本地政学」の意図するところは「地理学の実践性」であり、純学術的な地理学からの脱却を目指していたという(中田へのインタビュー)。中田は戦後書いた論文でも同様のことを述べている。①中田栄一「開発効果の予測と地理学」(小牧実繁先生古稀記念事業委員会編『人文地理学の諸問題』, 大明堂, 1968), 309~321頁。②同「平和の地政学」, 月報富士11, 1982, 2~5頁。
- 117)1941年12月に卒業した戸川俊正の「比律賓群島の地政学的考察」が、小牧の文章に反映されていることから指摘できる。①小牧実繁「南太平洋の地政学—フィリピンに重点を置いて—」, 大洋4-2, 1942, 26~33頁。②小牧実繁「フィリピン地理」, 文藝世紀4-2, 1942, 16~20頁。
- 118)①前掲20) ②553頁。インドを担当した浅井得一は、「主に英文の参考書を素にして、インドの研究をまとめ」たと述べている。②前掲12) ④3頁。蘭領東インドと太平洋諸島を担当した別技は、「まず当時の日本において入手し得る限りの内外の文献を渉猟し、東南アジアの地誌の基礎的知識を身につけることにつとめた。またマライ群島地域の研究のためにはオランダ学者の研究成果を消化する必要があるので、同時にオランダ語の学習も^(マヤ)平行して始めた」と述べている。③前掲20) ④347頁。
- 119)前掲29) ①10頁。
- 120)村上によれば、室賀はアメリカ合衆国の国家構造の核は、ワシントンやニューヨークではなくニューイングランドにあると述べていたという。また、野間のヨーロッパの見方も各国を背後で「操る」ユダヤ人に注目した独特なものだったという。前掲29) ①8頁。
- 121)①前掲9) 60頁(村上)。また、小牧はあまり研究熱心ではなくメンバーにやらせるばかりであり、地理学の研究や思想について意見を述べることもなかったという。②前掲29) ①7頁。
- 122)前掲29) ①10~14頁。
- 123)前掲8) ②16頁。
- 124)①前掲9) 58~63頁(村上)。また、村上には、「政策や戦略は事前に相手に知られてし

まっては、何の意味もない」という理由で、「全然活字になってない」という。②前掲12) ②75頁。③前掲29) ①12頁。

- 125) 現時点では、作戦計画の内容まで述べている回想は、1942年から総合地理研究会に参加した村上のものしか見出せない。
- 126) 総合地理研究会における室賀の報告「西貢港の地政学的位置に就きて」は、その大部分が「仏印の地政学的意義」という小牧の論文として、『現代』誌上に公表されている。しかし、結論部分「現下に於る西貢建設の方途」は、雑誌論文では「(下略)…」という扱いにされた。これは結論部分が、基礎的な作業の部分を総合し考察を行った部分、つまり、日本がこれからとるべき具体的政策について述べた部分であるからと思われる。①室賀信夫「西貢港の地政学的位置に就きて」、空間・社会・地理思想6, 2001, 110~112頁。②小牧実繁「仏印の地政学的意義—日本地政学の見地より—」、現代22-11, 1941, 112~121頁。
- 127) 小牧実繁・室賀信夫『大南方地政論』太平洋書館, 1945, 89頁。
- 128) 前掲95) ①27頁。
- 129) 前掲33) 参照。ただし、戦史叢書の「武漢攻略戦」と米倉の著書を対照しても、米倉の考えが実際の作戦のどこに反映されたのかはわからなかった。①防衛庁防衛研修所戦史室『支那事変陸軍作戦(2) 昭和十四年九月まで』(戦史叢書), 朝雲新聞社, 1976, 84~218頁。②前掲33) ①88~115頁。
- 130) 室賀信夫「印度支那半島に於る英仏の侵略とその政策」、空間・社会・地理思想6, 2001, 67~73頁。1939年12月に執筆されたものである。
- 131) ①室賀信夫「シンガポールの軍事地理的考察」、空間・社会・地理思想6, 2001, 98~106頁。1940年12月27日に執筆されたものである。シンガポールについて室賀は次のような著作もある。②同『英国の東亜拠点シンガポール』, 朝日新聞社, 1941。③前掲98) ②。
- 132) 村上は、『シンガポール攻略に当たって、

いくら大型の艦船を終結して海の側から攻撃しても、上陸占領するのは難しい、防備は陸の側に薄いから、艦船は援助攻撃するだけにとどめ、マレー半島の方に上陸した陸軍が主力となって攻撃するのがよい』というような戦術は、山下奉文大将によって実行されたが、これを最初に指摘したのは日本地政学の成果の一つであったという」と述べている。①前掲12) ②72頁。戦史叢書をもても、ジョホール水道側から陸軍を主体として攻撃をするなど、室賀の意見との共通性が読み取れる。②防衛庁防衛研修所戦史室『マレー侵攻作戦』(戦史叢書), 朝雲新聞社, 1966, 472~543頁。③前掲131) ①104~106頁。

- 133) 前掲126) ①。1941年6月20日に執筆されたものである。
- 134) ①前掲12) ②76頁。同頁で村上は、「私はジャングルの海岸地方からはいるのではなく、航空機で山上の高原地帯に降下するのがよいというような意見を出した。小牧先生から『まるで高天原からの降臨だな』と笑われたのを覚えている」と述べている。1999年のインタビューでも村上は同様のことを述べている。②前掲9) 60~61頁(村上)。
- 135) 前掲12) ②76頁。
- 136) 前掲12) ②76頁。
- 137) 兵要地理調査研究会は、情報に関する総合情勢判断、兵要地誌、および陸地測量部の管轄を担当していた参謀本部第二部第四班に所属する渡辺正少佐を中心に結成された本土決戦のための研究会であった。第1回の兵要地理調査研究会は、1945年4月30日、参謀本部第二部で開かれた。東京帝大の多田文男、辻村太郎、東京文理科大の田中啓爾のほか、資源科学研究所、陸軍予科士官学校、陸軍気象部、内務省国土局、東亜研究所、東京帝大、東京文理科大、東京高等師範学校、学習院の各組織に所属する計15名地理学者が参加したという。この場合に小牧ら総合地理研究会のメンバーは出席しなかったが、後に仕事を与えられた。前掲8) ①41~42頁。

- 138)①前掲8)②9～10頁。兵要地理調査研究会では、そのほかに『本土二於ケル上陸適地トシテノ砂浜概況』、『本土周辺主要島嶼ノ調査』、『海岸地形ノ特質概況』、『内陸機動価値判断図』、『食糧関係資料』、『活用可能道路網図(間道)』、『隔海度図』という報告書が作成されたという。②前掲8)①42頁。
- 139)①前掲12)②77～78頁。②前掲29)①23頁。③前掲9)62頁(村上)。
- 140)①前掲20)①17頁。②前掲12)②78頁。③前掲9)63頁(村上)。
- 141)①「小牧教授辞任」,朝日新聞12月28日,1945,2面。②「彙報」,史林31,1946,73頁。辞任の理由を,①では「戦時中における大学人としての責任を感じ」てのこと,②では「一身上の都合」と説明している。
- 142)1947年11月30日の官報号外(資格審査(仮指定)結果報告 第二号)に,小牧の名前が掲載されている。それは,大日本言論報国会の項であり,仮指定の事由として同会理事であったことが記されている。
- 143)前掲9)21頁(米倉)。
- 144)①前掲12)④4頁。②前掲20)⑦6頁。
- 145)①前掲20)⑩32～33頁。②前掲12)②80～87頁。③前掲9)63～66頁(村上)。
- 146)前掲9)63～66頁(村上)。
- 147)前掲9)65頁(村上)。
- 148)前掲20)⑩17頁。
- 149)千田稔『邪馬台国と近代日本』,日本放送出版協会,2000,231頁。
- 150)海野一隆「室賀先生の手紙」(日本地図資料協会編『室賀信夫先生追悼文集』,日本地図資料協会,1988),20～21頁。この手紙は,室賀が海野宛てに送った1946年5月28日付の手紙である。
- 151)①岡田俊裕「第2次世界大戦後の米倉二郎」,地理科学54,1999,117頁。また,米倉が政治地理学再考を唱えたり,小牧の地政学に対し,「片言隻語に貴重な創意が伺われるが,時局倉皇の折柄体系化されるに至らなかった事が惜まれる」と述べていることも注目される。②米倉二郎「政治地理学再考」,社会科学研究7,1959,25頁。③同「小牧実繁先生の人と学問」,歴史地理学149,1990,2頁。
- 152)村上と長年にわたる交流を続けていた久武哲也は,筆者宛ての手紙(2003年8月8日)の中で,「村上次男先生も,『日本地政学』が誤っていたとは,バージを受けたあとも考えておられませんでした」と述べている。
- 153)①前掲12)②11頁。また,村上は,小牧が『日本地政学宣言』を出した後,彼の意見を「参謀本部は参考にしていた」とも述べている。②前掲9)60頁(村上)。
- 154)前掲126)①。
- 155)①前掲20)⑤。②米倉二郎「仏印奥地視察日誌抄」(神谷誠編『南方軍総司令部参謀部兵要地誌班回顧録—岡さのへち会記念文集—』,創栄出版,1995),130～136頁。
- 156)①前掲20)⑭347～353頁。②前掲12)③15～16頁。
- 157)前掲20)⑦5～6頁。
- 158)前掲33)②88～90頁。
- 159)前掲20)⑭347頁。
- 160)前掲20)⑦5頁。
- 161)町田敬二「序文的思考—雪松・高嶋辰彦さんの思い出—」(森晴治編『雪松・高嶋辰彦さんの思い出』,私家版,1981),6頁。町田はジャワの南方軍司令部で宣伝班長を務めた人物であり,別技の上司に当たる。
- 162)前掲48)③73～74頁。
- 163)柴田陽一「小牧実繁の著作目録と著述活動の傾向」,歴史地理学47-2,2005,42～63頁。
- 164)①前掲74)237頁。②前掲9)260～261頁(池田師範学校で山口貞雄と別技篤彦の講義を受けていた田中耕三の発言)。③佐藤久「地図と空中写真,見聞談—敗戦時とその後」,外邦国研究ニューズレター3,2005,63頁。
- 165)①前掲12)②66～67頁。②前掲29)①17～22頁。地政学的地誌に加え,小牧の『日本地政学宣言』もよく売れており,結局五版まで出版された。③小牧実繁『日本地政学宣言 増補訂正版』,白揚社,1942,1頁。
- 166)①前掲86)④36～53頁。②前掲46)159～

- 161頁。
- 167) 前掲86) ④36～38頁。
- 168) 興南鍊成院は、1942年11月に設置された大東亜省の一機関で、南方占領地行政に従事する南方要員(司政要員、あるいは南方進出民間人)の鍊成を行う機関であった。同院の鍊成科目には、「大東亜地政学」、「大東亜地理」があった。同科目は、鍊成官を務めていた川上健三が担当したと思われる。太田弘毅「興南鍊成所の設置について—南方占領地行政要員の教育機関—」, 政治経済史学138, 1977, 16～31頁。
- 169) ①前掲9) 61～62頁(村上)。②前掲12) ②76～77頁。浅井得一は、1942年夏の時点で、ミッドウェーの敗戦を知っていたという。③前掲20) ③31頁。④前掲20) ⑤8頁。⑤前掲12) ④4頁。
- 170) 室賀は1981年、石田に対し次のように話した。「戦争が終ってから、一等国たる日本民族が、あの戦時中に、外国人に、卑劣な行爲をした数々の話を聞きまして、私は暗澹たる思いをしたものでした」。石田孝喜「室賀先生の思い出」(日本地図資料協会編『室賀信夫先生追悼文集』, 日本地図資料協会, 1988), 16頁。また、河野は、筆者のインタビューに対して、自分が兵隊として現地に赴くまで、日本のスローガン「八紘一宇」の実態を知らなかったと回想した(河野へのインタビュー)。
- 171) 例えば、岡田によれば、米倉の歴史認識は「侵略国の行爲を正当化する歴史認識といわざるをえない」という。①前掲33) ②86頁。小牧については拙稿を参照されたい。②前掲5) 9頁。
- 172) ①前掲14) ②p.81。②前掲14) ④p.15。
- 173) 総合地理研究会は、「最善の研究法により世界各地の地誌の編纂を行ひ、以て政治、経済、軍事、思想、学問等の各方面の学に対し、最善の地理的資料を供給すべし」と、浅井は述べている。前掲94) 75頁。
- 174) 岡田俊裕『日本地理学史論—個人史的研究—』, 古今書院, 2000, 14～16頁。
- 175) 本稿では利用できなかった同時代資料として、総合地理研究会のメンバーの個人資料がある。例えば、室賀の個人資料は、古地図や地理学史関係図書は京都大学附属図書館に、書簡などのより個人的な資料は京都大学大学文書館に収められている。後者には皇戦会関係書簡(1939～42年)、総合地理研究会関係原稿(1939～40年)、政治地理学講義草案(1942年度後期・43年度前期)などが含まれており、本稿の作業を覆す可能性を孕む資料とも考えられるが、現在のところ、整理中で閲覧することはできない。①松田清「室賀信夫氏個人資料の寄贈」, 京都大学大学文書館だより8, 2005, 5～6頁。なお、個人資料を用いる研究の有効性は、ハウスホーファー家の個人資料を用いたシュバングの研究が証明している。②前掲14) ⑤。③前掲14) ⑥。
- 176) 竹内啓一「ゲオポリティクの復活と政治地理学の新しい展開—ゲオポリティク再々考—」, 一橋論叢96, 1986, 534頁。
- 177) 満鉄調査部、東亜研究所、昭和通商、太平洋協会、回教圏研究所、善隣協会など。次の文献を参照。多田文男「日本地理学会50年の歩み」, 地理学評論48, 1975, 610～612頁。

The Role of Geographers in Strategy Research in the Asia-Pacific War :
The *Sogo Chiri Kenkyukai* and the General Staff Office of the Imperial Japanese Army

SHIBATA Youichi

This paper examines the role geographers played in the strategy research of the Imperial Japanese Army, focusing on the connection between the General Geographical Study Group (GGSG), or *Sogo Chiri Kenkyukai*, and the General Staff Office. Recently, much research has been done on the Japanese geopolitical discourses and the involvement of geographers in the Asia-Pacific War. One of the most important subjects in this issue is the GGSG, which was composed of servicemen in the General Staff Office and the geography researchers working at the Department of Geography at Kyoto Imperial University, as well as graduates of that university. However, a close look at previous studies reveals that basic facts about the GGSG were not interpreted correctly because of insufficient analysis of the original sources.

Therefore, using original documents, in particular the diary of Colonel Tatsuhiko Takashima who worked in the General Staff Office as well as reports written by the geographers who took part in the GGSG, I have studied a) the group's establishment and background, b) its activities and the changes in its membership, c) the results of GGSG research on geopolitical area studies and its involvement in Army strategy, and d) the breakup of the group at the end of war. The findings of the present studies suggest that the GGSG played a limited role in the war overall, although it did have the ability to perform tasks requested by the General Staff Office.

Key words: *Sogo Chiri Kenkyukai*, geopolitics, Saneshige Komaki, the General Staff Office, history of geography